

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30^{6m} 1 2 3 4 5

特 213

927

宮城縣電氣事業要覽誌

始



特213
927

昭和八年拾月二十日

宮城縣電氣事業要覽誌

行刊 日本電氣新聞社



内面半艶

マツダランプ

理想のコンビ
ランプと笠のコンビは夜の
世界を支配する必需品です。
最も名聲ある優秀品を
お選び下さい。

川崎市
東京電氣株式会社

仙臺市國分町 (電話一三三二番)

特213
927



宮城縣電氣事業要覽誌

昭和八年拾月二十日

行刊 日本電氣新聞社



内面半艶
マツダランプ

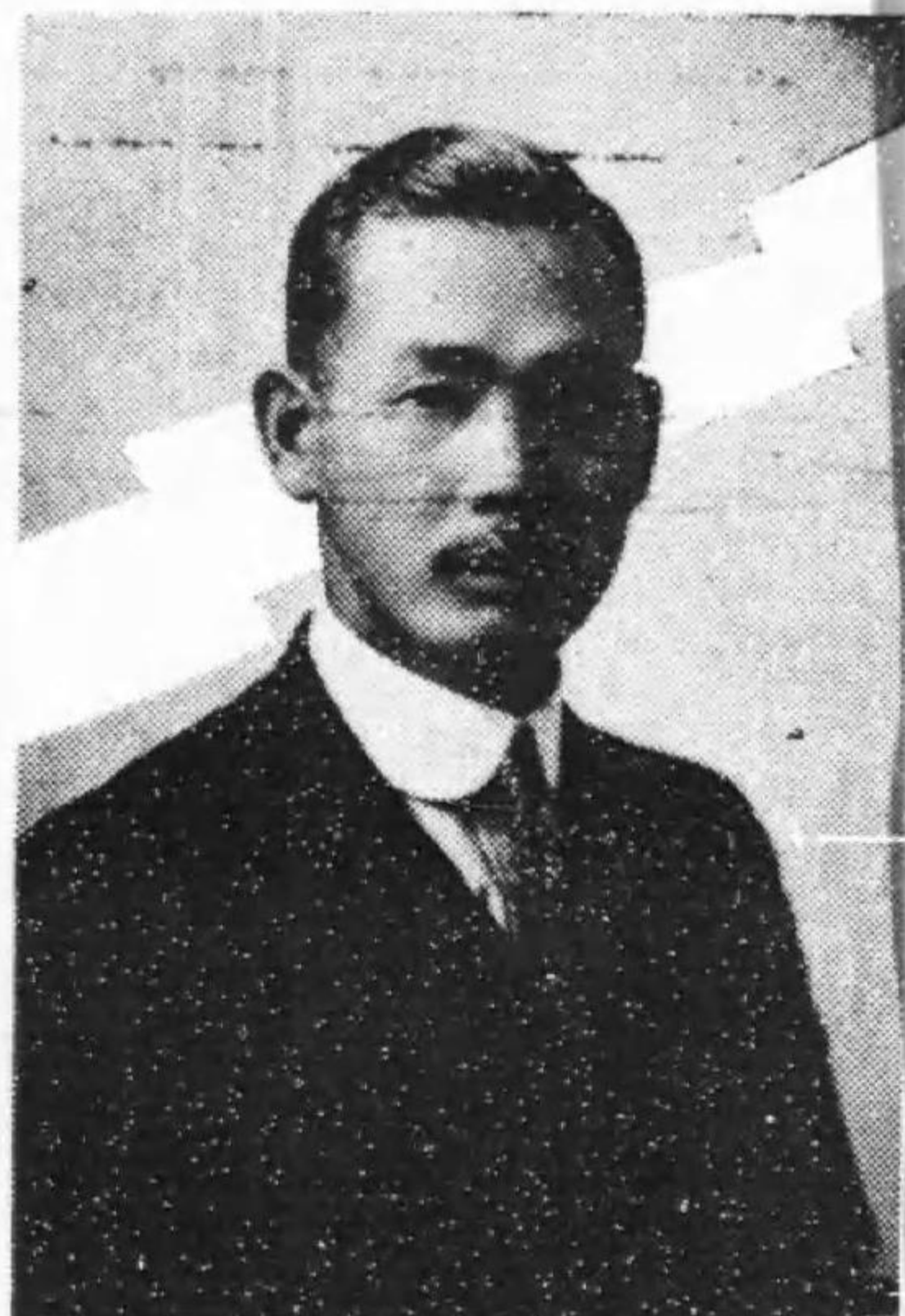
理想のコンビ
ランプと笠のコンビは夜の
世界を支配する必需品です。
最も名譽ある優秀品
を選び下さす。

川崎市
東京電氣株式会社

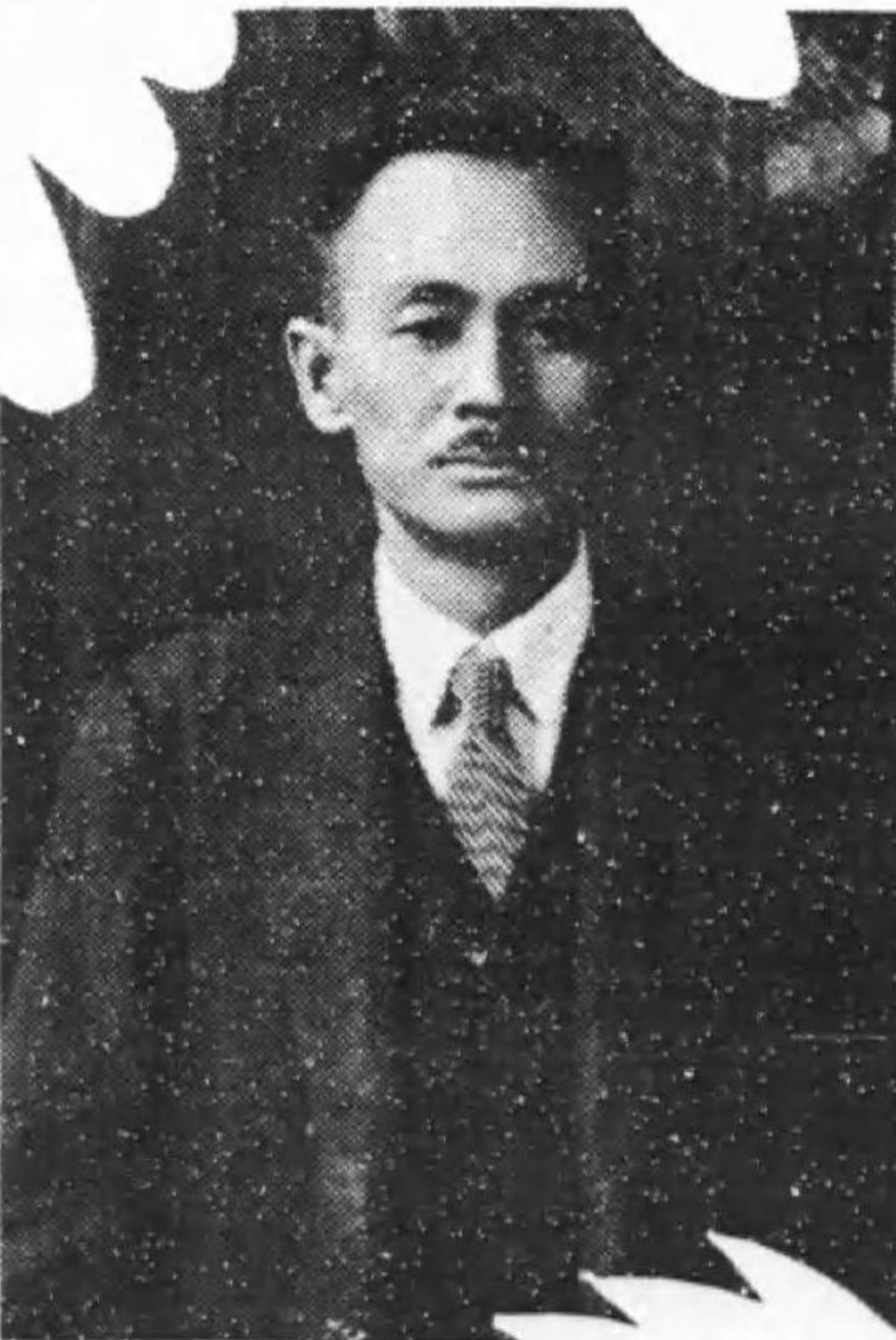
仙臺市國分町 (電話一三三二番)



熊田孝太郎氏 宮城縣電氣局長



赤木朝治氏 宮城縣知事



菅原卯一氏 宮城縣電氣局長
總務課長



中谷潔氏 宮城縣電氣局長
電力課長

昭和六年十月二十日
 宮城縣電氣局長
 菅原卯一氏
 總務課長
 赤木朝治氏
 宮城縣知事
 熊田孝太郎氏
 宮城縣電氣局長
 中谷潔氏
 宮城縣電氣局長
 電力課長



氏郎次政原桑 長部業事道水氣電市臺仙



氏次豊本山 道鐵氣電城宮
長々社會式株



氏治久林小 株電送北東
長々社會式

National

- ・明 朗・
- ・快 適・
- ・優 美・
- ・嶄 新・



當選號型

ナショナル受信機

ペントード抵抗増幅式



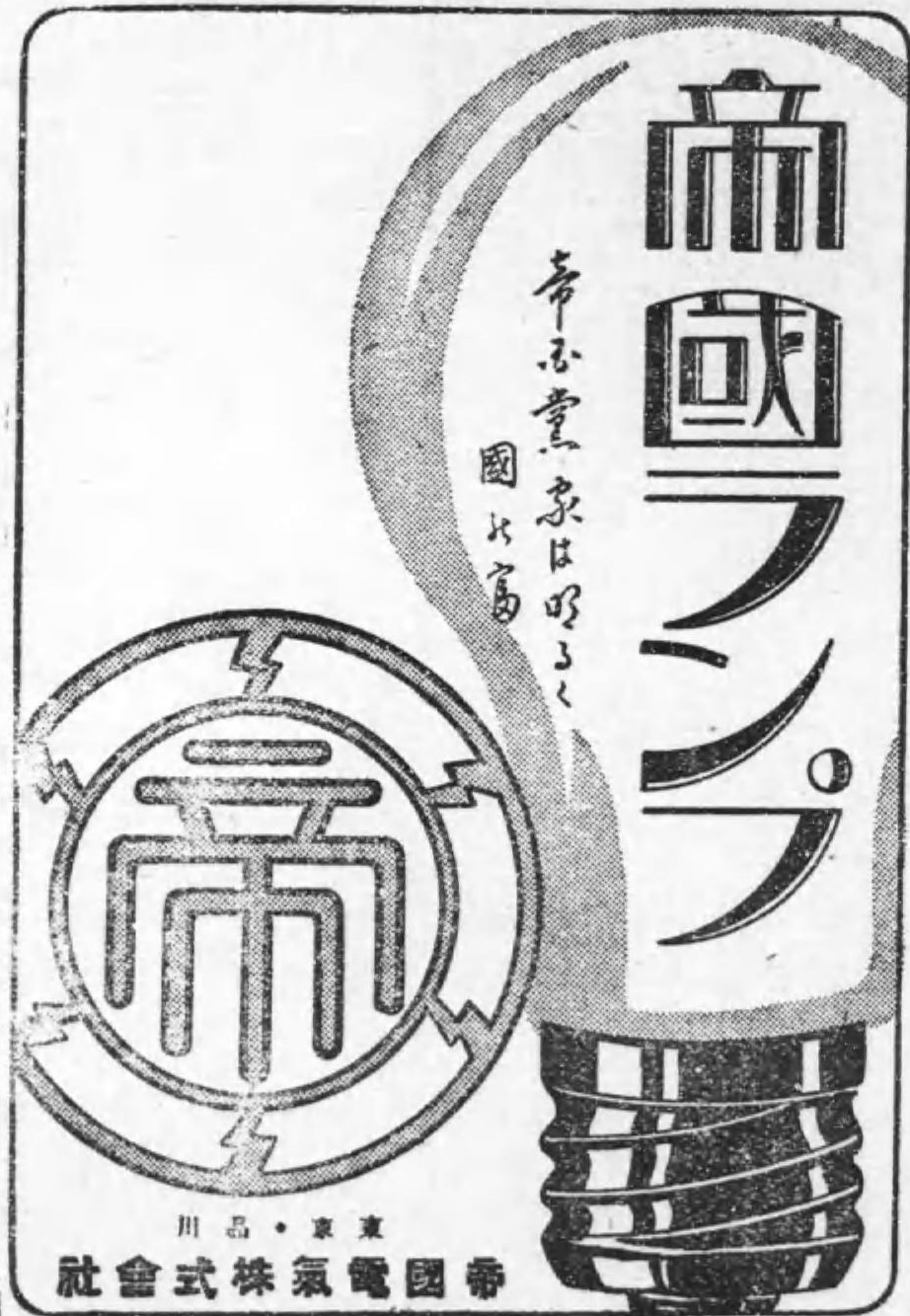
新發賣四球
R — 48 號

・斯界の王者ナショナル・

標 準 型
 ペントード
 抵抗増幅式
 當選號型の各種

松下電器製作所

仙臺出張所・仙臺市南町通リー六



川品・東京
帝國電機株式會社

(九一二一話電通町南市臺仙) 店支北東

明電舎モートル

日本エタニット會社製
 エタニットパイプ

株式會社

守谷商會東北出張所

仙臺市南町一七

電話一六三四番

主任 **三浦 戊介**

純 ▼ 極東ランプ
 國 ▼ 瓦斯入ランプ
 産 ▼ 神佛灯明ランプ

仙臺市北二番丁四四

極東商事東北出張所

多田洋吉

電話二、一六七

極東商事株式会社

東京市淀橋区下落合

電話大塚(86) 274, 3927



緒言

建設は希望である、回顧は現状正視の資である、過去を顧りみ、現状を認識するのは将来に對して希望と自信を固める素材である。

過去のない處に建設なく、建設のない處に希望はない。希望と建設は人生の本能である。

宮城縣の電氣事業には素晴らしい過去がある。本邦電氣事業史の第一頁を彩るばかりでなく其の發達過程と企業形態の推移は本邦電氣事業に一の示唆を與へてゐる。

縣下電氣事業の創生は他事業の兼營狀態の下に發足したが獨立經營の止むべからざるを間もなくおしひてゐる、次いで民營公營の分界點を暗示し都會と農村との間に一枚の扉を立てた。

民營公營の併立時代は全事業史の大部分を占め、仙臺市と一部の村落を除く郡部區域は縣電統一の成るまで民營下にあつて、電氣事業の進歩發展は民營を基調として培はれた。

株式資本に依る會社企業は實に事業の母胎であり、向上進歩の源泉をなしたが發展擴充の建設時代を終らざるうちに縣營統一を提唱せられ民營事業は一轉して公營治下に統制された。

此の關係を擴大してみるとき本邦電氣事業の發達史と略類似の形となり公營統制は懸がて來たるべき國營統制を思はしむる。

現状は平靜の夢圓らかに流れ民營當時の活氣は失つてゐるが同時に殺伐なる空氣も消えてゐる、國營統制の曙光として相等しき態様を呈現するであらうか。

木の葉彩る秋十月、鳴子溪谷に宮城縣電氣協會の總會が開かれる、かゝる好機に際し吾等は此の一本を呈して靜かに半世紀に亘る縣下電氣事業の過去を目前に繰り展るげ、現状を認識して、そして縣下文化産業の源泉として希望多き建設に想ひを廻ぐらしたい。

(同人しるす)

目 次

緒 言

電界人三人は語る(熊田孝太郎、桑原政次郎、小林久治).....	(一)
顧みる縣下電氣事業の創生期.....	(五)
あ れ は 狐 火.....	(七)
全國に冠絶する宮城縣營電氣事業.....	(八)
本邦に比類なき仙臺市電の偉容.....	(一九)
送電事業の覇者東北送電株式會社.....	(三九)
文化の華放送事業概況.....	(四七)
宮城電氣鐵道株式會社.....	(五四)
松島電車株式會社.....	(五七)
秋保電氣軌道株式會社.....	(五九)
繁榮華やかなる電機界	
東京電氣株式會社.....	(六〇)
千代田組仙臺支店.....	(六四)

守 谷 商 會.....	(六五)
松下電器製作所.....	(七〇)
小松原電氣商會.....	(七五)
旭電氣株式會社.....	(七五)
帝國電氣株式會社.....	(七八)
日本電線株式會社.....	(八一)
北斗電球株式會社.....	(八二)
エビス電球株式會社.....	(八三)
極東商事株式會社.....	(八四)
弘電社仙臺支店.....	(八五)
協立興業社.....	(八六)
東 光 商 會.....	(八七)
童子電氣商會.....	(八七)
水野電機商會.....	(八八)
神奈川電氣株式會社.....	(八九)
福島製作所.....	(八九)

電界三人は語る

宮城縣電氣局長 熊田孝太郎

宮城縣營電氣事業第一の功勞者は發案者たる當時の長官森正隆氏である、森知事は大正九年縣統一の大計畫を樹て縣下の各電氣會社と極秘裡に買収交渉を進め各社から覺書をとつて置いて同年十二月一日の縣會開會劈頭に電氣事業の縣管統制を發表し買収豫算一千五百萬圓の承認を求めたのであつた。

森知事の腹案によれば仙臺市營の中郡部に屬する區域即ち志田、遠田、加美郡方面の營業權並に供給施設を買収して足掛りとし次いで民間經營を買収して統制の實をあげやうと云ふ計劃であつた、そこで養堅堂を準備事務所充てて計劃を進めつたが何等の具體化をもみないうち長官の更迭となり、力石知事時代となつたが大正九年十二月から二ヶ年を経た大正十一年に至るも尙認可の指令が下らなかつたのである。

縣から逓信省へ提出した起業目論見書とも云ふべき收支豫算に對して逓信當局では非常に慎重な態度を執り収入は飽まで内輪に見積り、支出は大きくすると云ふ意見であつたばかりでなく起債の年限は三十年を越ゆるからずと云ふ鐵則を示し頑として動く氣配もなかつたので縣電には非常な打撃であつたが、結局買収豫算を減額するの止むなきに至り縣でも協議會を開く等難關へ乗上げ一頓挫を來さんとしたが、縣會の熱が頗る高く委員も亦縣財政並に産業振興の見地から諦めかねた、各社に對して主務官廳の方針と縣の苦衷を披瀝して買収價格の引下交渉を改めて開いた處、會社側でも夫れ々々總會を開いた結果利害の外に立つて縣の懇請を容れる事になり波瀾幾曲折の後一時は停頓せんとさへした買収も漸く達成する事が出來たのであつた。

扱て事業を開始して見ると成績は豫想外に良好を極め強い採算性を表示して縣の立案せる收支豫算に誤謬のなかつたことを現實に裏書したのである。大正十二年二月事業開始以來尙引續き擴張の計劃であつたが同年九月關東大震災が起り地方の事業など顧みられなかつたため全般的統制は遅れた、然し現在では當時二千キロ湯水時二千キロ計四千キロの電力不足を告げる大事業となり、之れが補給計劃さへ完成せば先づ經營上不足のない状態となり今や全國縣營電氣事業中鏘々の名をなし苦節酬ひられて縣民の前に堂々誇り得る立場になつたもので、今般宮城縣電氣事業要覽誌を刊行するにあたり聊か顧みて感慨ひとしほ新らたなるものがある。

仙臺市電氣水道事業部長 桑原政次郎

仙臺市營電氣事業の今日あるは總て先輩諸氏の努力の賜物である、明治四十年八月故遠藤市長より市會議員當時市會へ建議せる仙臺市の五大事業の一として提出せられたるものが市營電氣事業創生の動機で其の後同氏が市長となるに及んで完全に具體化し、明治四十三年九月の市會へ市營水利電氣起工の件として提出せられ同月二十七日可決確定したもので營業開始後の十ヶ年は殆んど投資時代とも云ふべく理事者の苦心も思ひ遣られるものがあつた、仙臺電力株式會社を買収して事業を承繼した當時は電力送電々壓一萬一千ボルト、配電々壓二千三百ボルト、五十サイクルで宮城紡績電燈の分は六十サイクル、送電々壓二萬二千ボルト、配電々壓二百ボルトにて市内に入亂れて交錯し全くの混亂状態にあつたので大正六年大畑發電所の建設を機に將來五十サイクル、配電々壓三千三百ボルトに統一しようとして計畫が樹てられた。

そして三居澤發電所の二千二百ボルト六〇サイクルを三千三百ボルトの五十サイクルに改め市内配電線路も

漸次三千三百ボルトに切替へたので配電關係に於ける電壓、周波數の統一が行はれた、たしか大正五年頃と思ふがカーボンからタンクステンに更へて電力の節約を計つたが歐戰好況時の需用は益々増加の一途を辿り所謂の黄金時代となつて大正十二年には碁石川發電所を落成せしめ又は宮城送電から受電して電力の不足を補ひ同十三年宮城送電の電力需給契約満期となつて火力發電所を建設して補給設備となしたものであるが、逐年増加して行く需用に對する不足電力は東北送電から受取して補填する方法をとつて來た、市營實施後十五ヶ年、電力の充實と統制とを計り此處に漸く今日の整美を見るに至つたものである、一方財政的方面は大正十年頃から一般會計へ編入し得るようになり漸年順調に進展して今日の如き業況を示すに至つたものである。

電氣協會東北支部長 小林久治

インフレーション政策の實施、農漁村匡救事業費の散布、軍需工業の活況、産業復活、農村産業の振興等々の好影響を受け我國財界は久しきに亘る暗鬱な雲を一掃して今や力強く更生の門出をなし、從て電氣事業も對内外の好條件に併行して昔日の黄金時代を再建すべく雄々しく更生の意氣に燃えてゐる、此の祝福すべき時代潮に乗り貴社が東北電氣界に重きをなす宮城縣電氣事業要覽誌を刊行し過去の足跡を顧み現勢正視の資料たらしめることは寔に時宜に適せるよき企てである。

宮城縣下の電氣事業は自分の今日ある上に於て最も因縁淺からざる關係を有し、何人より以上の深き關心を持つものであるが其の發達進歩は多少の起伏はあれ概して順調な徑路を辿り來たれるものと思つてゐる。消費都市仙臺市を中心として發電送電、配電何れも調和を保つて普及發達の實を擧げ縣下の文化産業に益する處甚

だ大なりしを確信するものである、然し一步視野を轉じて現在から將來に就て考察を廻ぐらすならば過去の發展過程を以て直ちに無條件で安心することは出来ない、即ち縣下の概況は依然として農村産業が經濟の基礎をなし近代産業の實質は未だ尙ほ縣下經濟界を左右し得るだけに伸びてゐないとは云ひ、電力の自然増加は毎年七八百キロに達する景況を示し財界の發展力が充實すればより一層旺盛なる需要力を示すものと觀測される、又海港鹽釜は縣下唯一の商港として活潑なる活動を續け年々急速なる膨脹發展を示しつつあつたが、縣は産業海港都市鹽釜を建設するために總ゆる努力と便宜を吝しまず積極的に工場誘引に萬全を圖つてゐるので、縣の希望通り産業建設が行はれるときは之れ亦尠くも年々七八百キロの電力を需要することは云ふまでもない、一方農村を視ると軌進灌溉、排水施設は漸次充實の傾向にありとは云へ今後の開發に俟つものが一層多く電力の需要は殆んど無限に存在するものさみなければならぬ、電氣事業者の立場から想ひを茲に致すとき當然考へなければならぬことは安心して使用出來る電力を如何にして何處に求むべきかの問題である、勿論需要と相俟つて電源充實は眞面目に考究せられ遺憾なき大策が樹立されるとは思ふが當面の問題としては鹽釜火力發電所の如き有用なる設備を最も有効に利用する意圖の下に縣下各事業者が提携協同するの必要があり、且つこうした協同精神を美はしく將來にまで延長して縣民の期待に背かざる成果を擧げなければならぬと考へる。要約すれば縣下文化産業の源泉をなす電力を充實し縣民の信頼を動搖せしめざるの方途は一に業者相互間の純眞なる協調にありと考へる次第で、此の機に處し一言、平常の所懐を披瀝し得たるは甚だ愉快とする處である。

顧みる縣下電氣事業の創生期

東北に於ける電氣供給事業の創始者は宮城紡績電燈會社である、故に同社こそ吾が東北電氣事業史上最古の供給事業と云はなければならぬ、宮城紡績電燈會社の萌芽は實に明治十一年の春で當時仙臺市内の有志者間に洋式紡績事業の有望なるを認められ協議の末一大會社を創立して本邦産業の發達を計ると同時に他面舊藩士族授産の方便たらしめやうとの趣旨から時の縣令松平直氏に宛て宮城紡績會社設立の願書を提出したのである。

然る處間もなく「會社條令の制定せらるゝまでは自由に着手して差支へない」と云ふ棚ボタ式の認可指令を受けたばかりでなく政府當局から有力なる後援と便宜を惜しまざる旨傳へられかくて事業は頗る順調に進捗して同十四年に至り初めて宮城紡績會社の創立を見ることが出来た。

然し乍ら創業早々の際とて技術の熟練者を缺き兎角事業が豫期通り捗らなかつたが經營者の不撓の努力と忍苦とは遂に報ひられて十六年に至り漸く紡績機械の運轉に成功した。

然るに本工場は廣瀬川の水利を使用するに便利な地位にあつたので間もなく工場點燈を目論む發電事業を思ひ立ち、特に東京に人を派し東京電燈株式會社に就いて電氣事業を研究せしめ技術的經濟的に絶對的なる確信を得たので明治十九年小規模の發電機を設置して照明史上劃期的なる電燈點火を完成したのである、之れが水力電燈の嚆矢であつて東京に於て明治十一年の三月中央電信局

開業祝賀の夜會に孤光燈が點火せられてはゐるがそれは「グローブ電池」を用ひたものであつたから水力發電機による點燈は此れを以て最も古いものとしなければならぬ、即ち東京電燈株式會社に於て一般供給事業を開始せる前年であつた、其後他地方に於ける電氣事業の勃興を見、電氣事業は獨立經營の下に發展しなければならぬことが判つたので別に有志者相寄り紡績會社の水利權を借り受けて仙臺電燈株式會社を設立し百二十馬力の發電機を据付けて明治二十七年七月初めて仙臺市内へ電燈が點せられた、之れが東北に於ける一般電氣供給事業の始祖である。

斯くて供給事業を開始するや市民は其至便にして經濟的なるを認め從て需用も激増して電力に不足を告ぐるに至つたので更に三百馬力の火力發電機を増設して需給のバランスを保つと云ふ盛況さであつた。

一方紡績會社の方は日清戰役後の事業熱勃興の機運に乗じて資本金を増加し更に八百五十馬力の水車を増設して大いに飛躍せんとしたが、工事落成間もなく經濟界に大動搖を來し一轉して極度の業界不振に陥つて當初の目的半ばにして蹉跌を生じ止むなく八百五十馬力の水車を擁して空しく時機の到來を待つと云ふ困窮状態に陥つた。

其後明治三十二年に至つて紡績、電燈兩會社合併の機運が熟し同年十月合併成立、宮城紡績電燈株式會社と改稱し資本金は百五十萬圓内拂込金十六萬圓を以て清新なる第二期的活動期を迎へたが紡績事業の有望なることを認識せらるゝと共に大資本による大企業が各地に勃興し規模の小さい同社は自然壓迫せられて收支償はざるに至つたので、一時營業を休止して紡績工場全部を東京製綿株

式會社に賃貸し翌三十三年以後は電燈電力を本業とし専ら其發展に努力したので需用は益々増加の一途を辿り、同四十二年は白石電力株式會社を併合し同四十四年には一千二百馬力の發電設備を増加し翌大正元年仙臺市營電氣事業計畫と共に買収せられ市の經營下に移つたのであるが、生誕以來艱難多き道程を歩みながら尙且つ新興事業の底力を發揮して成長したのは荷厄介な紡績事業と手を切り只管電氣事業の發展膨脹に努力したからであつたと云ひ得やう、然しそれは兎も角水力發電機による電燈點火をなし後年照明界の明星となつた電燈の先驅者が我が仙臺市であつたことは顧みて甚だ愉快なる次第である。

あれは狐火

明治十九年宮城紡績會社が小さな發電機を据付けて三居澤へアーク燈を點火した際の話であるが、毎晩時を同じうして不思議な光りが三居澤から發するので土地の者が騒出し、駐在所の巡查は毎晩三居澤方面に不可思議なる光の見ゆるは恐らく狐火に相違ないと云ふ報告を本署へ送つたと今に秋の夜の譚りぐさになつてゐるが、電燈とは此處ものだと云ふことを知らせてからは參觀者が頻りに押しかけ首をかしげて不思議な眼をみはり水から火が出るなどは絶対にあり得べきものでないと、如何にことをわけて説明しても誰一人信するものがかつたこと云ふことである。

全國に冠絶する宮城縣營電氣事業

ま い が き

宮城縣の電氣事業は大正九年事業統一に手を染めて以來數千萬圓を投じて民間事業買収を完了し同時に縣下に活力を付與し他面金融パニックを未然に防止し得た資材となつたことは政治的經濟的に奇與せる處も多く、單に縣營電氣事業統制完成の悦び以外政治的經濟的の悦びも亦大であつたと云ひ得るもので理事者の英斷に對し滿腔の謝意を表すべきものである。

電氣事業の源泉を成すものは云ふまでもなく發電施設で山間僻地に水利を開發して巨萬の資本を固定しなければならぬ、從て限度ある縣内富力の中から巨萬の資本を固定することは其投下資本の比に應じて金融の硬塞を來たすは當然である、然るに縣電の統一は此深山幽谷に固定せる數千萬圓の資金解放の動因となり縣下金融界を潤ふすこと大なりしばかりで、昭和六、七年の金融パニックに際し隣縣銀行が軒並に急襲されたに拘らず獨り本縣のみは恐慌を免かれ得たが、之れ畢竟縣電統一に依る資金還元の賜にして實に我が宮城縣の縣政史上に特筆大書すべき裏面の功績と云はなければならぬ。

又統一後に於ける業績に就いて觀るも、曾つての聲明を裏切ることなく大正十五年九月には料金の整理統一を斷行して年額五萬四千餘圓、昭和三年五月には更に供給規程の改正を行つて年額三萬一千餘圓合計八萬五千餘圓の料金引下げをなし且つ昭和六年末現在收支計算表によつて見るも一般經營費以外、擴張並に改良工事費として五十萬二千圓、工作物費に二十萬七千圓、災害復舊準備積立金に二萬三千圓、公債償還積立金に百八十

七萬一千圓、年賦金償還に十萬三千圓、同利拂ひに一萬二千圓等を差引き尙且つ二十萬三千圓を一般會計に繰入れた外に五十二萬四千圓といふ巨額の殘餘金を得た餘裕ある經營は理事者の經營手腕に因る處大なるも、亦統一計畫の誤りなきことを立證するもので萬人等しく讚辭を齊しませぬ處である。

宮城縣電氣事業創設の趣旨は仙臺市を除く縣内多數の私設電氣會社に於て經營する縣内電氣事業全部を買收して電氣事業の統制を圖り、電燈電力の供給を簡易にして普遍ならしめ且つ料金を低廉均一ならしめ以て其需用の普及を圖り、産業の發達と農漁村の振興を促進し縣民の福利増進を圖ると共に將來縣財政緩和の大動脈たらしめんとするものにある。

以上の趣旨の下に大正九年以來實行方法に就て調査研究を重ね、先づ仙臺市の經營に係る事業の内郡部に屬する區域、山三カーバイト株式會社及び大崎水電株式會社の三事業を買收し、其買收費並擴張費總額金七百拾萬四千四百圓の起債許可を受け大正十二年二月に至つて初めて縣營電氣事業の營業を開始した。

爾來事業の成績良好なる進展を見、事業益金も亦豫想以上に計上し得られ經營に關する不安は全く解消したので大正十五年九月料金の整理統一を行つた際年額五萬四千餘圓、昭和三年五月再び供給規程の改正を行つて年額三萬一千餘圓合計八萬五千餘圓、電氣料金引下を爲し、縣民負擔の輕減に資し且つ大正十五年度より當初計劃の縣債償還年限三十年を二十九年に短縮し、更に定義電氣株式會社、宮城清瀧電燈株式會社及齋川電氣株式會社の三事業を買收し、次いで東北電燈其他は昭和五年三月の宮城送電興業株式會社買收を殿りに茲に縣電創始當初の統一目的を達成して事業の擴張

並に改良を行ひ今や仙臺市を除く全縣下を供給區域として全縣民の熱誠なる支持の下に文化産業の源泉として遺憾なき經營基礎を建設するに至つたのである。

宮城縣營電氣事業は、大正九年以來四代の知事を経、萬難を排して遂に縣下事業統一の大望を完成し、其の基礎は縣下全般に亘り僅かに首都仙臺市を除くのみとなつた。事茲に到るまでには經營當事者の幾多心血を注ぎし至誠熱意の賜に依る處多しと雖も、當局の意志を贊助翼賛したる百萬縣民の理解をも追懷禮賛しなければならぬ。

事業創始當時に比較すると發電力、供給電燈、供給電力共異常なる増加を示し更に昔日の面影を止めない躍進振りでそれだけ當局の責任は重且つ大を加へた譯である、偕て買收統一後の縣電は曩の公約に基づいて電力設備の完全なる聯繫並に他事業者との連絡を計り、一方送電幹線の建設を中心として送配電線の改修整理廢合を斷行の上有機的脈絡を完成して價値効果を高め燈火に、動力に熱に等々多角的積極政策を實施して着々縣電統一の精神を發揮しつつある景觀は實に驚異に値する縣營開始以來農業經濟向進に資する處多き農村電化は急速に普及され漁業電化にも特筆すべき新施設が加へられやうとしてゐる、又産業振興には殊の外意を用ひられ縣下海關の稱ある鹽釜埋立地を利用せんとする工場に對しては特定料金を以て低廉なる供給をなすべき旨の發表をなすなど産業の建設誘導に積極的の働らきかけ消費縣の傳統を一舉に覆へして産業宮城の建設に寧日なき努力は賞讃に價する、而かも一方經營内容の充實、縣債整理に就ては嚴然既定方針の大綱を堅持して動かざること山の如く悠々迫らざる大風格を持して歩一步固めあげて行く全貌は目覺ましき限りである、兎

に角料金を低減し、サービスを改善し、そして縣財政上の根幹たらしめんとする、此の矛盾せる背面形態を巧みに整調して誤りなき縣電當局者の手腕は決して凡ならざるものである。

觀じ來たり、觀じ去れば縣營電氣事業の將來には實に重大なる責務がある、内には建設改良、採算の延引ならぬ重要問題があり、外には縣民經濟負擔の軽減、産業の助長、農業經營の改善等々殆んど枚擧に遑なく經營の良否は直ちに縣民生活に影響する密接な關係にある。

然らば今日以後の縣營電氣事業は何處へ行く。

我國の電氣事業は舊來長足の進歩を示し、電燈事業の如きは全く世界に冠絶するまでに普及發達し、其の急速なると普遍的なるは先進列國に比して何等遜色のない事績を示してゐる。電氣の利用は光から力に到り更に轉じて熱に移らんとしてゐる。

斯く世界有爲の發達を遂げたプロセスは事業者の努力、國民の理解、新利用の考究、技術的研究等擧げ得べき要素は多々あるに相違ないが、取り分け重視しなければならぬのは營利經營に基礎を置いた事である、若し當初以來これを非營利經營を主體として居れば或いは今日斯くの如き發達をみるに至らなかつたかも知れない、それ程電氣事業の經營は至難である、殊に近年は公益事業に對する社會的觀察の態度が變つて、電氣事業の如きは民衆の前に提供され、民衆の判斷を俟たなければならなくなつただけ、經營は一層複雑になつて來た。從て我國に於ける公營事業の多くは殆んど失敗に歸し、好成绩を擧げてゐるものは寥々曉天の星を數ふるに等しい、此中にあつて獨り出色を擡んでゐるものは宮城縣營電氣及仙臺市營電氣其他三四の指を屈するのみである、而かも宮城

縣營電氣は公營中のナンバーワンを以て自他共に許され、將來囑目されつつあるものの首頭に位する、其の成績は民間經營の優なるものを凌駕し、進歩的施設は將に先驅者の稱を以てするに足る、何れの方面から觀察するも事業の形態は磐石の基礎に立ち、着實穩健なる全風格は絶對的信頼をかけるに惜しくない。

然し縣電統一の完成は決して且々砥の如き順調なる推移のみによつて實現せるものでなく或ひは政治的政黨的難關、經濟的支障或ひは縣民の理解なき批判など幾多荆棘の路を踏んで努力と誠意の結晶として實を結んだものであつて、此の間にあつて百難敢えて恐れざるの嚴たる氣魄を以て臨める歴代各知事の苦心英斷もさること乍ら、隱忍自重よく事業大成の基礎工作に腐心碎骨せる現局長熊田孝太郎氏の功も亦大なりと云はなければならぬ。

全國公營電氣事業界に誇る宮城縣電氣事業の概況は先づ左の如くである。

供給區域

宮城縣内仙臺市ノ一部外一市十六郡

發電設備内容

許可出力

三九町	一、八〇〇キロワット
一六一村	一、八〇〇同
横川發電所	一、八〇〇同
渡瀨發電所	一、八〇〇同
白石發電所	七五〇同
茂庭發電所	一、三〇〇同
人來田發電所	九〇〇同

發電設備
(許可出力)
落成
水力發電
火力發電
受電

一六、八二キロワット
三四〇同
四、〇〇〇同
六、〇〇〇ヴォルト

鬼首發電所	一、〇〇〇同
荒雄川發電所	八五〇同
鳴子發電所	一、三五〇同
池月發電所	二、七〇〇同
門澤發電所	六六三同
栗駒發電所	一、七六二同
淺布發電所	五二〇同
花山發電所	一五〇同
新月發電所	一九〇同
大川發電所	一三〇同
外小發電所計	九五六同
氣仙沼火力	三四〇同
變電設備內容	
沼邊變電所	四五〇キロヴォルトアンペア
角田變電所	一、二〇〇同
北郷變電所	一、五〇〇同

增田變電所	六〇〇同
鹽釜變電所	六、四〇〇同
小牛田變電所	一、二〇〇同
廣淵變電所	三、〇一〇同
古川變電所	二、九五〇同
飯野川變電所	六〇〇同
女川變電所	九〇〇同
上沼變電所	六〇〇同
佐沼變電所	一、二〇〇同
南二又變電所	三、一五〇同
若柳變電所	六〇〇同
石巻變電所	一、五〇〇同
南小泉變電所	一、〇五〇同
東長町變電所	一、八〇〇同
津谷變電所	九〇〇同
氣仙沼變電所	一、五〇〇同
小野田變電塔	一〇〇〇同

四釜變壓塔	一五〇同
鳥矢崎變壓塔	九〇同
電線路 (昭和八年三月現在)	
送電	四、九五四杆
互長	二、一二四本
支持物	鐵塔 三八〇基
	鐵筋コンクリート柱 五五六基
配電	木柱 三、三一九本
互長	五、一〇四、一杆
支持物	鐵塔 六基
	鐵柱 一二本
	木柱 一〇〇、七〇二本

常時電燈 (昭和八年八月現在)	
需用家數	一二八、四一二戶
定額燈量	八、七四四戶
從量燈數	二〇〇、一〇三燈
計	七七、六六〇燈
總燭光數	二七七、七六三燈
總電氣力	四、八七〇、六三九〇P
休燈	五、九八五、二KW
筒數	六五、四九一燈
電力 (昭和八年八月現在)	
電動機	五三二戶
定額需用家數	一、九八四戶
從量需用家數	

定額個數	六三五
從量個數	二、〇五八
總馬力數	一一、五二八
換算電氣力	九、三四五、九八KW
電熱	
需用家數	二、七七七戸
裝置數	二、九四四箇
總電氣力	一、〇一一、五KW
大口電力	
需用家數	二二戸
總電氣力	
定時	二、七三八キロワット
不定時	三、一四〇キロワット
總電氣力	
定時	一三、〇九五、三九キロワット
不定時	三、一四〇、〇〇キロワット
縣	價 (七年三月現在)

起債總額	二八、六二一、一〇八圓
既償還額	六三〇、五〇〇圓
未償還額	二七、九九〇、六〇八圓
固定資産	(七年三月現在)
收入	二八、七四〇、七一八圓
支出	
電燈收入	二、〇九〇、五一三圓
電力收入	八七五、四八二
器具損料	一六六、三四五
手数料、諸工料	四〇、一六〇
電球及器具賣拂代	七二、九二四
雜收入	一三九、八〇二
其他	四、八一五
計	三、三九〇、〇四一

給料諸給	三七八、三三二
需用費	五三、六七八
收入取扱費	八三、一四五
電力購入費	二四〇、一一三
工作物費	二〇五、二二三
雜支出	九、五〇八
公債費	二、〇八五、〇六四

擴張工事費	一二〇、八六七
積立金	六、一八九
水源涵養費	一、九三二
一般會計繰入	一八五、〇〇〇
豫備費	二〇、〇〇〇
其他	一、〇〇〇
計	三、三九〇、〇四一

附記

前記第八項の縣債未償還額二千七百九十九萬六千八百八圓の借入利率は第一回から第八回までは七朱乃至八朱の高率であつたが夫等は殆んど償還を了へて現在高率で未償還のものは第一回の殘額四十一萬六千圓、第七回の殘額二十萬圓を存するのみで第九回以降のものは何れも六朱五厘以下で最低は四朱八厘である。

宮城縣電氣局	
總務課	白石出張所
工務課	岩沼出張所
	鹽釜出張所
	小牛田出張所
	石巻出張所
	佐沼出張所
	氣仙沼出張所
	一迫出張所

本邦に比類なき仙臺市電の偉容

仙臺市は東北一の大都會である、全國的にみる時は無論中都市より以上一步も出るものではないが、人口密度の稀薄な東北に於ては其の首位にある。杜の都、學都の別名がある通り嘗つての同市は純然たる消費都市で學校、諸官廳、師團の存在に依りて市の經營を維持され體面を保つて來た、然し近代社會組織の經濟的發展は到底消費都市としてのみの力で立行かぬことをおしうるに至つたので輓近漸く産業都市構成の氣運勃興し漸次生産方面の誘導熱が旺んじた、所謂の城下町氣分から新興都市として更生せんとする潑刺たる元氣は全市に漲り渡り、因習の影は陋巷からさひ沒せんとしてゐる。即ち經濟都市建設の過渡期に直面したのが今日の仙臺市である。

仙臺市の電氣事業は市直接の經營になり電氣水道部の下に統轄されてゐる、市營電氣事業の創始は明治四十四年一月に遡り爾後秋霜春化幾變遷を経て全國屈指の堅實な事業を建設するに至つたものであるが、事業創始當時の經緯を顧みると頗る興味がある、即ち古い沿革的記録を左に掲げる。

市營統一の端緒

仙臺市は東北の要部に位し人口十萬を有し近く鹽釜港の修築横斷鐵道の貫通を控へ將來大に發達

すべき地勢に在るが、諸般工業の基礎をなす原動力の供給充分でなく、且つ使用料金も亦低廉でない、從來當市には明治廿七年以降市内に電燈電力を供給する電氣事業會社はあつたが斯る公共的事業を私立會社の經營に委ね其の利益を獨占せしむるは市百年の長計でない、加之當市附近には水利開發可能の地點多くて之を利用すれば、水力電氣の好條件に恵まれてゐるので之を市營とし、一は市工業の發展に資し一は將來市民の負擔輕減の一助となすべしとの見地に立ち、當時の市當局者及市政に參與する議員並に具眼者の胸裡磅礫たること久しく、明治四十年八月市會の建議に依り其の決議を経て市營事業調査の爲め七名の調査委員を擧げ左の五項に關し調査を委囑したのである。

- 一、仙臺市營上水工事起工得失
- 二、仙臺市營水利工事を興して工業者に原動力を供給するの得失
- 三、仙臺市區改正事業起工得失
- 四、仙臺市内へ市營を以て電氣鐵道布設の得失
- 五、仙臺市營の公園設置するの得失

爾來調査審議に年を重ねてゐるうち（此間に仙臺電力株式會社が設立され）明治四十三年九月に至り市營水利電氣事業は市將來の爲め利益尠からざるを以て速かに實行すべきものと認められ左の報告を市參事會に提出した。

市營水利事業起工の件

- 一、本市は本市附近の水利を利用し電燈及原動力の供給事業を市營とすべきこと

- 二、本事業の経費は市債により其の償却は事業より生ずる利益を以て之に充て新に市民の負擔を増すことなきを要す
- 三、前項の水利事業は宮城紡績電燈株式會社並仙臺電力株式會社事業又は兩社中一社の事業を買収するか若くは他の方法を立つる等市參事會に於て便宜處理すること
- 四、起債償却方法又は電燈電力使用料の安價並本事業に關し新に機關を具備する方法等總て規定は更に市會の議定を経べきものとす

二、電氣事業市營の決議

明治四十三年九月二十二日市は左の議案を市會に提出した。

市營水利電氣事業起工の件

- 一、本市營を以て水力電氣事業を起し電燈及原動力の供給をなすものとす
 - 二、前項起業に要する経費は金百四十萬圓を限度とし市債を募集して之に充て其の償還は本事業より生ずる収入金を以て之に充つるものとす
 - 三、宮城紡績電燈株式會社並に仙臺電力株式會社の事業又は兩社中一社の事業を買収するか若くは他に方法を立つる等市參事會に於て之を定む
 - 四、起債並に償還方法及起業執行後に於ける經營の方法は別に之を定む
- 同月二十七日の市會に於て前案第三項を左の通り修正他は原案可決された。

- 一、市參事會は既設會社を買収する契約を爲すことを得

三、仙臺電力株式會社の買収

市長は市會の議決に基き更に市參事會の決議を経て仙臺電力株式會社に向つて買収の件を交渉したが仙臺電力株式會社は明治四十一年七月の創立になり資本金二十五萬圓全額拂込みで水利を市の西方七里許りの大倉川に取り市の一部及郡部に電燈電力を供給してゐた。

明治四十三年十月十一日同社より買収に應ずる旨回答があり同時に財産調書も提出されたので市は市參事會員二名吏員三名を派遣し之が實査を遂げた結果

財産總額金二十八萬七千三百九十九圓九十九錢

水路費	八五、〇三五圓〇八〇	地所	四一、一圓五二〇
機械費	六四、九六〇圓二八〇	什器及備品	二、三一五圓七四〇
内譯		商品貯藏品	二二、八六三圓一八〇
貸付機械	二、六〇五圓〇〇〇	本社費	一一、八九〇圓六五〇
貸付器具	一一三、七〇六圓二三〇	電線路費	七二、四九二、四六〇
建物	七五二圓八五〇		

と評價し右の財産を功勞者報酬、株式利子及其他雜費を加へ金三十五萬圓にて買収の肚を決め市會の決議を經明治四十三年十二月七日市長は同會社長と賣買假契約を締結し契約後新たに増加したる財産三萬三千七百六十六圓を追加し總計三十八萬三千七百六十六圓の内金六萬五千圓を明治四十

四年六月内渡し同年七月残額全部を交付し物件権利一切の授受を了して市營の本格的第一歩に入つた。

四、新工事起工計畫

明治四十三年市會の決議に基き早速既設會社に向つて買收の交渉を進めた處、仙臺電力株式會社は速に買收の契約を結んだが宮城紡績電燈株式會社は容易に應諾しなかつたので市は別に發電配電の起工を企劃したが、其の大意は名取郡鳳鳴瀧を利用し同郡秋保村新川字瀧倉に取入口を設け宮城郡廣瀨村大字上愛子字白澤に發電所を設置、地下線十五哩を布設し、市内に送電する設計にして其の起工年度及豫算の大意は左の如きものであつた。

工事	同	明治四十四年度	鳳鳴瀧水路工事及地中線九哩
工事	同	四十五年度	市内地中線八哩
工事	同	四十六年度	同
工事	鳳鳴瀧工事費	二十五萬圓	
工事	地中線工事費	五十五萬圓	
工事	器具機械費	十七萬圓	

明治四十四年二月起工を申請し同年十一月許可を受け同四十五年五月市内地下線工事に着手し其の一部の完成を了したが、其の間宮城紡績電燈株式會社も亦買收に應ずる態度を示し遂に六月二十五

日買收假契約成立するに至つたので本工事全部を停止した。

五、宮城紡績電燈株式會社の買收

宮城紡績電燈株式會社は明治十六年廣瀨川の水力を利用して綿絲紡績を經營せる宮城紡績會社に創まり明治二十七年資本金を五十萬圓とし宮城水力紡績製絲會社と改め、發電所を設け綿絲紡績の外製絲及電燈を兼營し明治三十二年十月仙臺電燈株式會社と合併して社名を改め、明治四十二年四月資本金を百萬圓に増加し同年六月白石電力株式會社を合併し資本金を百十二萬圓とし仙臺及仙南郡部に電燈電力を供給して居つた。

電氣事業市營に決するや仙臺電力株式會社の買收に次ぎ宮城紡績電燈株式會社と買收交渉を開き明治四十四年一月工學博士山川義太郎工學士扇本眞吉を招聘して同社の内容及財産並價額等の調査を委嘱し其の調査報告に基いて買收金額を金百四十萬六千四百圓ときめた、然るに同社は譲渡には異議ないが、買收金額は百七十五萬圓でなければならぬと固守して譲らず、交渉數次に及ぶも纏らずして宮城縣知事の價額裁定を仰いだが之れ亦不調に歸したので遂に遞信省に委嘱し、遞信技師工學博士澁澤治氏調査の結果明治四十五年六月金百七十三萬八千圓にて買收するを相當と認むると云ふ斷案を下されたので、相互の協定茲に整へ同年六月二十五日該會社長と市長との假契約を結び爾來諸般の手續を進め大正元年十二月四日金十三萬圓を内渡し同月二十四日物件権利の引渡を受け而して買收殘金額は大正二年以降數次に分割交付し大正四年八月全部の支拂を完了した、

六、事業資金 集經過

明治四十三年度に於て仙臺電力株式會社の買収資金及新起工費として金百四十萬圓の公債募集の許可を得たが時恰も金融不振の爲め募集し得ない状態に陥つた、然し一方買収資金は急速に調達しなければならなかつたので金五十萬圓を一時借入れ以て前記の支拂及事業費に充當した、明治四十四年十二月日本勸業銀行より低利資金六十四萬三千圓(年利五分三厘四年据置十五年々賦均等償還)を借入れ前項一切の借入金を返済し、併て新起工費に充當し明治四十五年に至り當初の計畫を變更して新起工を見合せ宮城紡績電燈株式會社を買収することとなり、更に巨額の資金を要するを以て公債募集額を金二百萬圓(年利六分五厘)と改め許可を得前記日本勸業銀行借入金を差引き金百卅五萬七千圓を廣く募集したが財界の状況依然として振はず募債の成立を見るに至らなかつた、然し資金の要求は切なるものありし爲め第二回として短期公債金四十五萬圓(年利八分)を借入れ以て買収金の内渡及事業擴張費に充當した處、時偶々歐洲戰亂の勃發となり金利益々昂騰し既定の利率では募債困難の状態となつたので暫く時機を待つてゐたが、戰亂の前途尙遠く財界の恢復金利低下などに到底豫測すべくもなかつたので、大正四年九月既定公債額百卅五萬七千圓の内十萬圓は事業積立金より運用し金五萬七千圓は事業費剩餘金より支辨し殘額百廿萬圓を年利七分を以て募集の計畫を立て許可を受け日本勸業銀行をして引受けしめて同年十月全部發行募入することが出来たのである。以上は仙臺市電生誕の歴史的記録である。

全國市營電氣事業中最高の業績を維持し斯界美望の的となつてゐる仙臺市電も其の創生期を顧みるとかなり深刻な苦難を経たことが判るが、電氣事業の眞價が理解されず況して其の前途に對して何等の見透しも持たれなかつた時代に事業の將來に確信を抱き文化産業の源泉をなすべきものと斷定した見識はたしかに先見の明として誇るに足るものであつた、斯かる先覺の血をひく傳統的精神は未だに事業經營の底流をなし經營に施設に多くの見るべきものがあり、市産業文化に深甚なる貢獻をなし加へて市財政上最も確實性ある恒久的財源として重きをなしつつあるは市民の以て至上の慶福としなければならぬ、市電の現勢は發電設備常時四千七百七十五キロワット、補給二千五百キロワット、特殊二千五百七十五キロワット融通二千キロワットにて此の外受電量は常時二千五百キロワット、特殊一千キロワット融通二千キロワットと云ふ堂々たるもので、此れに對する供給は電燈十燭換算にて定額十七萬九千八百二十八燈、從量二十六萬四千四百九十燈を數ひ動力供給は電動機二千三百五十九臺、五千九百四十七馬力の多きに達する、電熱は近來長足の普及經過を示し裝置數七百六十五個にて一千七十六キロワットを消費するなど供給形態は漸次進歩的色彩を濃くして來た。仙臺市に於ける照明度は東北有數の高度を示し殊に商店照明にみるべきもの多く動力の需要は年と共に加速度的の増進を續けてゐる、此れ畢竟各種勞力の電化、産工業の勃興によるもので當市に於ける産業現勢は動力需要によつて大體を觀測することが出来る、仙臺市電の獨歩的地位は其の經營の堅實なる點にある、市勢に對する収益比率、事業收支のバランス等によるまでもなく同市電ほど採算的であり經營基礎が堅く磐石の感を強くしてゐるものはない、公營事業計畫積出の折柄公營可

否の論はさることながら其の経営成績に就いては各方面から非常な關心を拂はれてゐる、凡百の實績は公營當初こそ豫期の業績を擧げ得るが長期に亘るや漸次調査研究の不備、公營の缺陷を曝露して蹉跌を來たし、又は公益事業としての本務とサービスとを缺くなど對内外に亘る弱點を晒けて公營主要目的の一たる財源としての價値を失ひ甚だしきに至つては自治經營上最大の痛とさへなつてゐるに拘はらず、獨り同市電のみは歴史を重ねるに従て益々其の偉力を發揮し財政的には市政唯一の財源となり、文化的には其の母胎となつて總ゆる意味に於ける東北の首都建設の動脈となつてゐるばかりでなく、餘裕綽々たる財的實力は供給施設乃至サービスの上に遺憾なく現はれ市民の感謝の樞軸となつてゐることは如何に優秀なる内容を保持してゐるか實證して餘りあるものである、斯く優れた電氣事業の全貌を數字的に解剖すれば大體左の如き内容を有し天下無類の好成績は重厚寡黙、手腕の士たる部長桑原政次郎氏の多年苦心の結實と云ふことが出来る。

事業概況

- 一、發受電所容量(昭和八年三月末現在)
 - 常時 四、七七五キロワット
 - 補給 二、五〇〇同
 - 特殊 二、五七五同
 - 融通 二、〇〇〇同

内 譯

- 一、三居澤發電所容量 一、〇〇〇キロワット
- 二、大倉發電所容量 七五〇同
- 三、大堀發電所容量 一、〇〇〇同
- 四、碁石川發電所容量 一、五〇〇同
- 五、土樋火力發電所容量補給 二、五〇〇同
- 六、仙臺變電所受電容量
 - 常時 二、一〇〇キロワット
 - 特殊 一、〇〇〇同
 - 融通 二、〇〇〇同

(一) 電 燈

現在の供給範圍は仙臺市中舊名取郡西多賀村を除く一圓にして電燈取付箇數は十九萬四千五百二十一、需用家數は三萬六千二百九十三戸、十燭光換算燈數は定額十七萬九千八百二十八燈、從量二十六萬四千四百九十燈である。

(二) 電 動 力

昭和八年三月末現在電動機力装置箇所数は二千三百五十九箇所で此總馬力数は五千九百四十七馬力八分一厘、前年度に比し五十九箇の増設で馬力數に於ても五百七十六馬力七分二厘を増加して居る、而して需用家數は一千八十一戸である。

(三) 電 熱

本年度現在電熱装置箇所数は七百六十五箇所、總キロワット數千七百七十六キロワット、需用家數は二百七十五戸である。

一、使 用 料

- 一、取付燈數 十九萬四千五百二十一燈
- 內 有料 十九萬四千三百五燈
- 無料 二百十六燈
- 十燭光換算燈數四十四萬四千三百十八燈
- 內 有料燈 四十四萬三千二百七十八燈
- 無料燈 一千四十燈
- 使用料調定額九萬七千六百八十三圓
- 取付一燈當り 五十錢三厘

換算一燈當り 二十二錢

二、電 動 力 使 用 料

- 装置馬力數 五千九百四十七馬力
- 內 有料 五千八百四十馬力
- 無料 百七馬力
- 使用料調定額一萬九千五百六十圓
- 一馬力當り 三圓三十四錢九厘

三、電 熱 使 用 料

- 装置キロ數 一千七十六キロワット
- 內 有料 一千七十三、五キロワット
- 無料 二、五キロワット
- 使用料調定額三千六百二十二圓
- 一キロ當り 三圓三十七錢四厘

(四) 徵 收

電燈、電動力、電熱、扇風器の使用料等の徴收は他の營利會社とは違ひ強制力をもつてゐるので今日の不況と雖も相變らず好成績を示し、殊に九十六の納付組合を利用して好結果を納めてゐる。

電氣使用料調定濟額は總計百四十二萬四千六百九十九圓
内電燈使用料百十七萬七千七百七十二圓

扇風機使用料 一千二百七十二圓

電動力使用料 二十一萬七千三百八十五圓

電熱使用料 二萬八千三百二十九圓

而して徴收濟額は其九割八分四厘に相當する、また同年度中缺損處分に落した額は千八百二十八圓で、電燈料の不納が一千八百十七圓、電動力料の十圓九十四錢等である、未收として八年度へ繰越した額は一萬九千九百二十九圓で、百四十萬圓の使用料から見ても極めて少額である。

一、會計

(一) 公債

市の電氣關係公債總額は二百九十八萬九千一百圓で内償還濟が七十四萬八千三百四十二圓四十五錢、外に七年度に於ける償還額が十六萬八千四百四十三圓五十三錢
差引二百七萬二千三百十四圓が現在額である、利率は六分が最高で四分二厘が最低である。

(二) 積立金

市電は負債も大きい積立金も多い、第一、第二、第三積立金を合した現在額は二百六十三萬二千七百七十七圓三十七錢と云ふ莫大な額である。

第一積立金は減損補填、原價償却災害準備等の爲めにする積立であつて百二十八萬圓あるが其内九十三萬四千圓が他へ運用されてゐるので差引現在額三十四萬六千餘圓である。

第二積立金は事業費を補填すべき意味合ひの積立てで九萬七千六百九十四圓であるが内四萬三千九百圓が運用されてゐるから差引五萬三千餘圓の現在殘額である。

第三積立金は財産増殖を目的とするもので百二十五萬三千圓程あるが其の中百二十四萬九千圓を運用してゐるから差引四千六百九十五圓の殘額である。

之等諸積立金二百六十三萬二千餘圓中から運用金合計二百二十二萬七千圓を差引き積立金の手許有高は四十萬五千圓である。

(三) 昭和七年度歳入

電氣使用料及手數料	一、四〇三、一一五圓
取付工料	二六、八三五圓
商品賣却代	一六、六〇一圓

既設電氣工作物賣却代
 雜 形 入 四一〇圓
 電車收入 一三三、四四七圓
 健康保險金 二七八、九四九圓
 八一五圓
 線 越 金 一三〇、五六二圓
 市 債 六〇、〇〇〇圓
 歲入合計 一、九四〇、七三八圓

(四) 歲出經常部

事務所費 一七七、九九一圓
 事業費 四〇三、三八〇圓
 商品購入及賣却工事費 一一、九一五圓
 雜支出 三、六五四圓
 電車事業費 一九七、〇五三圓
 健康保險費 一、六三一圓
 經常部計 七九五、六二六圓

歲出、臨時部

電氣費 一一八、七七五圓
 積立金 二六九、八四九圓
 電氣事業公債費 八九、七四二圓
 電車事業公債費 一九九、七六五圓
 電氣事業運用金 六九、三三五圓
 編入金 二八〇、二九六圓
 火災保險費 五二四圓
 電氣軌道敷設費 三七、五九七圓
 臨時部計 一、〇六五、八八七圓
 歲出合計 一、八六一、五一三圓
 歲入歲出差引殘高 七九、二二五圓

(五) 貸借對照表 (單位圓)

機 借 方
 械 一、二七六、一三四
 水 路 一、一九一、一六三

給料	七四、〇八七	雜給	五三、四八九
事務費	一三、一一〇	修繕費	三四一
發電所費	五二、四八二	電力料	二二八、〇五九
變電所費	一、三一八	送電線路費	四、六二八
配電線路費	九九、三一〇	電球費	三三、八六八
貸付器具維持費	一五、一二三	商品及賣却費	一五、六〇三
諸稅	一二八	諸支出金	四、六六三
電車營業費	一九七、〇五三	公債利子	二六、九三〇
同軌道負擔	九三、六五一	雜損	三六、〇九一
小計	九五三、九四〇	益金	八〇六、九一五
合計	一、七六〇、八五六		
使用料	一、四二二、八七一	手數料	二二二
工料	二七、〇五八	商品賣却代	一六、七二二
取付器具賣却代	四一〇	雜收入	一三、五八一
預金利子	一、〇四一	電車收入	二七五、七六一

(六) 損益計算書

電線路	一、二四三、八八三	貸付器具	九、七九〇九一
同機械	八〇、六四四	地所	一九三、六三六
建物	二八〇、四八六	電氣軌道敷設費	二、六三九、〇四一
同改良費	一一〇、六五三	什器備品	五七、六五二
在庫品	七二、七七八	預金	三、六六四
市金庫	三五、五六〇	使用料未收入	一九、九二九
手數料未收入	五九	工料未收入	二二四
商品賣却未收	一一一	雜未收	四六
過年度未收	八、六九二	假繰越金	四〇、〇〇〇
軌道費假勘定	三七、五九七	合計	八、二三一、一五八
市債	二、〇七二、三三三	市債償還元金	二、二七四、七六〇
擴張費	三、二六一、二〇四	積立金運用	一〇〇、〇〇〇
運用金戻入元金	三九八、三四四	寄附金	一〇〇、〇〇〇
繰越益	二四、五二九	合計	八、二三一、一五八

電車雜收入 三、一八八 合 計 一、七六〇、八五六

益 金 處 分

一金八拾萬六千九百拾五圓
 一金拾貳萬六千九百拾貳圓
 合計金九拾貳萬七千六百八圓

內 譯

金六萬二千七百十五圓
 金十萬五千七百二十八圓
 金二十八萬八千四百圓
 金五萬九千圓
 金十五萬七千三百三十二圓
 金四萬二千九百六十四圓
 金八萬圓
 金十一萬五千五百五十四圓
 金二萬四千五百二十九圓

七年度益金
 前年度繰越金

公債償還高
 同軌道負擔
 積立金
 運用金戻入
 一般會計編入
 水道事業費編入
 都市計劃費編入
 電氣事業擴張費
 翌年度繰越益

仙臺市電氣水道事業部電氣關係者

職 名	氏 名
市長	澁谷 德三
助 長	高橋 林造
事業部長技師	桑原 政次郎
主任技術者技師	桑原 政次郎
營業課長主事	渡邊 甚太郎
營業課長書記	橋本 作造
徵收係長書記	渡部 富重
電燈係長技師補	神部 義夫
電氣課長技師	桑原 政次郎
電力係長技師	長谷 政東
工作係長技師	追沼 秀彦

送電事業の覇者東北送電株式會社

電力販賣事業では兎もすれば基礎薄弱に陥り易い難點を持つ東北電界にあつて斷然同業他社をリードして獨り悠々たる進展の一路を辿つてゐるのに東北送電株式會社がある、同社は東北電燈並に山形電氣の兩系資本を主成要素として創立され、山形電氣に電力の供給を仰いで宮城縣下に消化するのを目的とする、供給先は宮城縣電、仙臺市電、東北電燈を初め仙臺に於ける有力工場である、山形電氣は非常に質の優れた電力を持つ關係から宮城縣產業界からも大いに歡迎されたが更に將來一抹の過誤なきを期するため鹽釜海岸に尠大なる火力發電所を建設し送電事業の絶對保證施設を完備したので一層信用を高め其の需要量は漸年増大するのみである、然し東北送電自身の事業としての今日迄の経過は單に基礎確立の時代から活躍期に足を踏み入れただけで全精力を傾ける活躍舞臺は將來に延長されてゐると云へ得る、同社の電源たる山形電氣では昭和二年十一月以來山形縣西村山郡川土居村水ヶ瀬に東北有数の發電力を抱藏する最上川水系寒河江川を利用して最大出力一萬二千七百キロの大發電所の建設工事を起し二ヶ年の歳月を閲して四年十一月十日通水式を舉行した。同發電所の建設趣旨は山電自身の發展並に電力充實にもあるが他面東北送電を通じて宮城縣下に電力支配權を握ることも考へられたものである、換言すれば山電發展の榮養素は當社の俊敏なる活動に依て培養され同社の營業的進出は山電の積極方針に結合すると云ふ不即不離の關係に立ち、水

ヶ瀬第五發電所の完成こそ局面更新のポイントとなつた。

東北送電生立の記

東北送電株式會社は宮城縣下に於ける電力需用の増加に應ぜんが爲め山形電氣株式會社と東北電燈株式會社との出資により創立せられたものであつて去る大正十年頃から宮城縣に於ける電力の需用逐年激増し縣内電氣事業者何れも其對策に苦心しつつあつた折柄東北送電が生れることになつた動機は大正十三年七月東北電燈社長小林久治氏が東京に於て當時山形電氣社長塚田正一氏と會見して電力供給の協議を爲した時に初まり次いで同年八月小林社長は同社の米倉、谷井兩重役と共に沼山發電所の工事状況を視察し其結果確信を得て茲に愈々具體的交渉に進み山形電氣及東北電燈兩社重役は飯坂溫泉に於て再度の會見をなし、越へて同年十月盛岡市に開催せられし電氣協會東北支部總會を期して三度び兩者の會見交渉となり當時仙臺通信局電氣課長たりし淺倉文夫氏がその間に仲介斡旋の勞を執られた結果電力料金其他の協定成立し新たに送電會社を創立することに決定した。

下交渉の全部纏つた處に於て兩社關係者を發起人として同年十一月十日仙臺市に發起人會を開催して定款を作製し、發起人中塚田正一、稻田善兵衛、長谷川仁、名古屋爲毅、小林久治、谷井文藏、佐藤鐵郎、米倉清五郎の八氏を創立委員に推薦して會社創立に關する一切を委任し創立事務所を小田原前東北電燈株式會社内設けた、續いて其翌日創立委員會を開き小林久治氏を委員長に推薦

し山形電氣と電力受給の契約を締結し且つ會社設立趣意書、事業概要、起業目論見書及び收支豫算書等を作製した。

即ち會社の資本金一百万圓、株式總數二萬株とし内一萬七千五百株は發起人及賛成人にて引受け、殘株二千五百株は同年十二月一日より同十五日までを申込期間として之れを公募した處、一般事業界不振の折にも拘らず各方面よりの歡迎する所となり期日前に滿株に達するの狀況であつた、斯くて翌大正十四年一月末日第一回株式拂込みを求め一株に付金十二圓五十錢を徴し同二月十三日拂込完了せるを以て同年三月一日仙臺商業會議所に於て創立總會を開き茲に會社の創立を見るに至つたのである、此れが東北送電である。

會社創立事務の進行に伴つて事業に對する準備も進捗し同月二十一日仙臺市外原町なる變電所敷地で起工式を擧げて送電線路並に變電所の第一期工事に着手し同年十月送電線一回線及び變電所六千「キロヴォルトアンペア」の工事を終へ同年十二月より東北電燈に定時電力四百「キロワット」不定時電力六百「キロワット」の供給を開始し翌大正十五年一月より仙臺市に定時電力九百「キロワット」不定時電力六百「キロワット」の供給を開始した、同年七月山形電氣が鹽釜海岸に建設せる火力發電所竣功と共に其發電力全部を當社が引受け受電する事となり益々電力豊富となり供給先の逐次的需用増加に對して常に充分なる供給を行ふ事が出来た。

昭和四年七月東北電燈會社の宮城縣内事業は宮城縣に讓渡せらるゝに至りしを以て從來會社との契約に基く電力は引續き宮城縣に供給する事となり新たに東北電燈との間には五百「キロワット」

の豫備電力受給契約を締結した。

同年十一月山形電氣に於て豫て建設中なりし水ヶ澗第五發電所工事落成したので山電との電力受給契約を更改して當社の受電量を更に増大し豫て宮城縣並に仙臺市との間に締結したる長期大量の電力供給方針の確立を見るに至つたのである、又之れに先だち豫て着手中なりし當社第二期工事たる送電線一回線増架及び仙臺變電所に六千「キロヴォルトアンペア」受電設備増設の工事も同十二月末落成を告げ昭和六年十一月山形電氣會社に於て工事中なりし鹽釜火力發電所並に鹽釜仙臺間送電線路増設工事落成に伴ひ其の増加發電力七千「キロワット」も全部當社に於て受電することゝなつた。

之より先同年五月頃より宮城縣内電氣事業者に於て非常渇水又は不時の故障等の場合に要する電力の圓滑な融通方法に關し考究され、山形電氣も參加協議の結果右の如き場合には臨時に山形電氣鹽釜火力發電所を運轉し當社を通じ實費を以て之が融通補給を爲すことゝなり契約を作成し主務省の認可を得て之を實施し今日に到るまで續いてゐる。

東北電燈は宮城縣内事業讓渡後最も意を岩手縣南送電聯絡に用ひ當社仙臺變電所より岩手縣黒澤尻に至り更に同地より秋田縣に達する送電線の完成に努め已に之れが竣功を見るに至つた、即ち當社設立當初の計劃は山形、宮城兩縣の送電聯繫にあつたが、時勢の要望は更に其範圍を岩手、秋田に及ぼし茲に四縣下に亘る送電聯絡を見、今後逐次増加すべき各地方電力の需要に應ずる事を得るに至つたので四縣電力界に於ける當社の位置は非常に重要なものとなつた。

昭和八年六月末日現在の拂込資本金は八拾萬圓で同年上半年期配當金は年七分であつた、現在重役並に電力設備は左の通りである。

電力受給關係

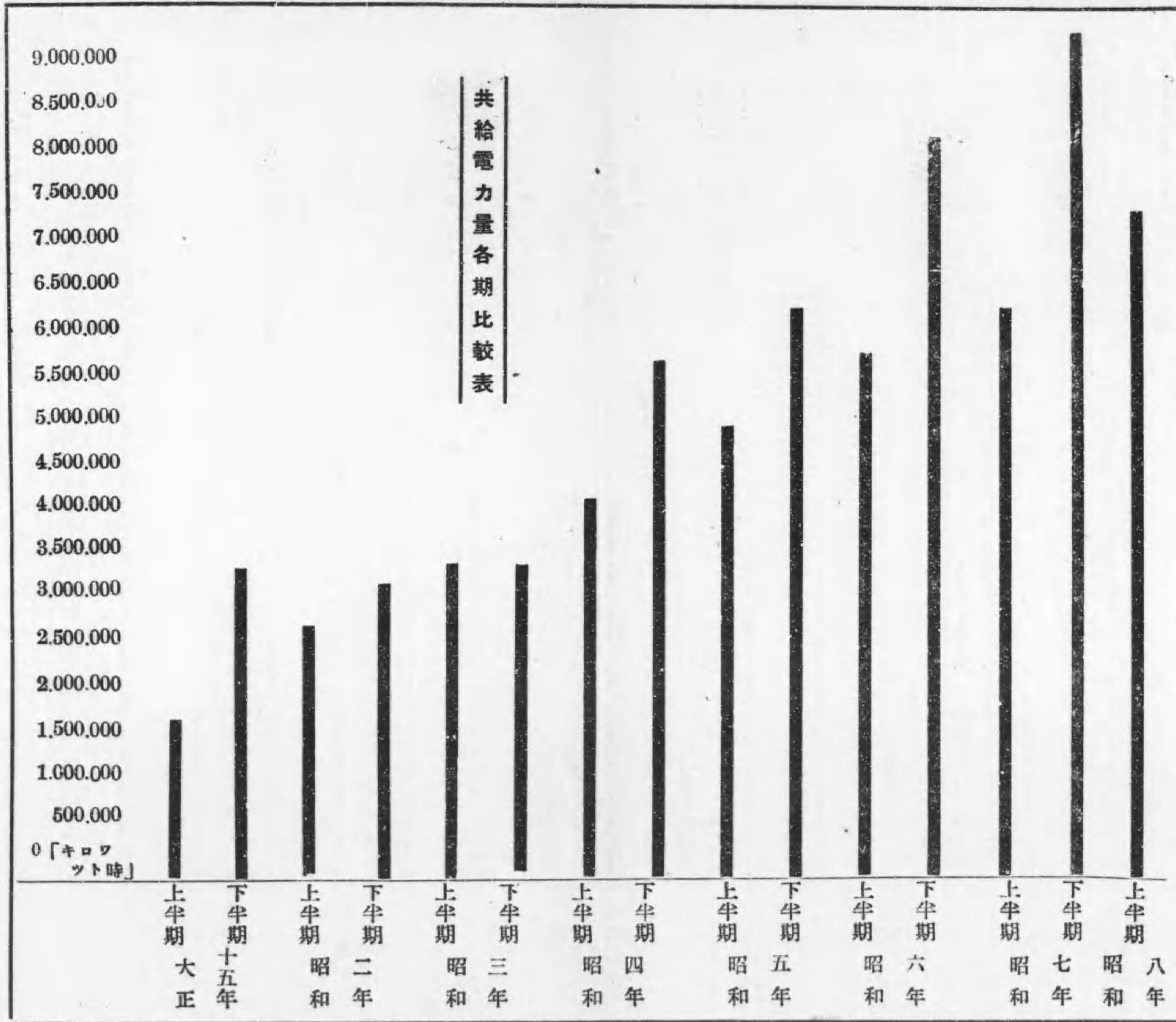
現在電力受給關係左の如し

同	同	同	監	同	同	同	同	同	取	取
									締	締
									役	役
			查						社	社
			役						長	長
音	奥	中	佐	鈴	長	本	戸	米	荒	谷
山	山	島	藤	木	谷	間	田	倉	木	井
源	德	鐵	清	半	清	虎	勤	文	久	
茂	太		吉	兵	五					
秀	郎	治	郎	助	内	衛	雄	郎	也	藏
										治

一、送電線路設備
 線路互長
 數長
 (山形縣長崎町—仙臺市原町間)
 四十一哩八分
 二回線

	供			受				
	給			電				
	山形電氣	東北電燈	仙臺市	東北電燈より	山形電氣より			
	機補	融豫	融特常	豫	融	機補特	常	
	械械	通備	通殊時	備	通	械械	給殊時	
	備給					備給		
	同	同	同	同	同	同	同	最大
	四	一、一	二、二	一	三	四	一	五
	〇七〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	四〇〇〇
	同	同	同	同	同	同	同	「キロワット」

鐵	塔	標準鐵塔	高サ地上	七七呎六吋
		最高鐵塔	同上	九五呎
		標準徑間		七五〇呎
		最長徑間		一八三九呎
電	線	ビーエス零番相當撚硬銅線及び		
送	電	ビーエス二零番相當撚硬銅線		
送	電	一〇、〇〇〇「キロワット」		
周	波	六六、〇〇〇「ヴォルト」		
	數	五〇「サイクル」		
外に木柱單獨電話線路を設置す				
二、變電所設備				
變電所名稱	仙臺變電所			
同所所在地	仙臺市原町若竹			
變壓器				
容量	二、〇〇〇「キロヴォルトアマペア」六臺			
一次電壓	六六、〇〇〇「ヴォルト」			
二次電壓	三三、〇〇〇「ヴォルト」			
及	二二、〇〇〇「ヴォルト」			



送電容量
送電電圧
波電數

外に木柱單獨電話線路を設置す

二、變電所設備 (屋外變電所)

變電所名稱
所在地
變壓器
容量

仙臺變電所
仙臺市原町若竹

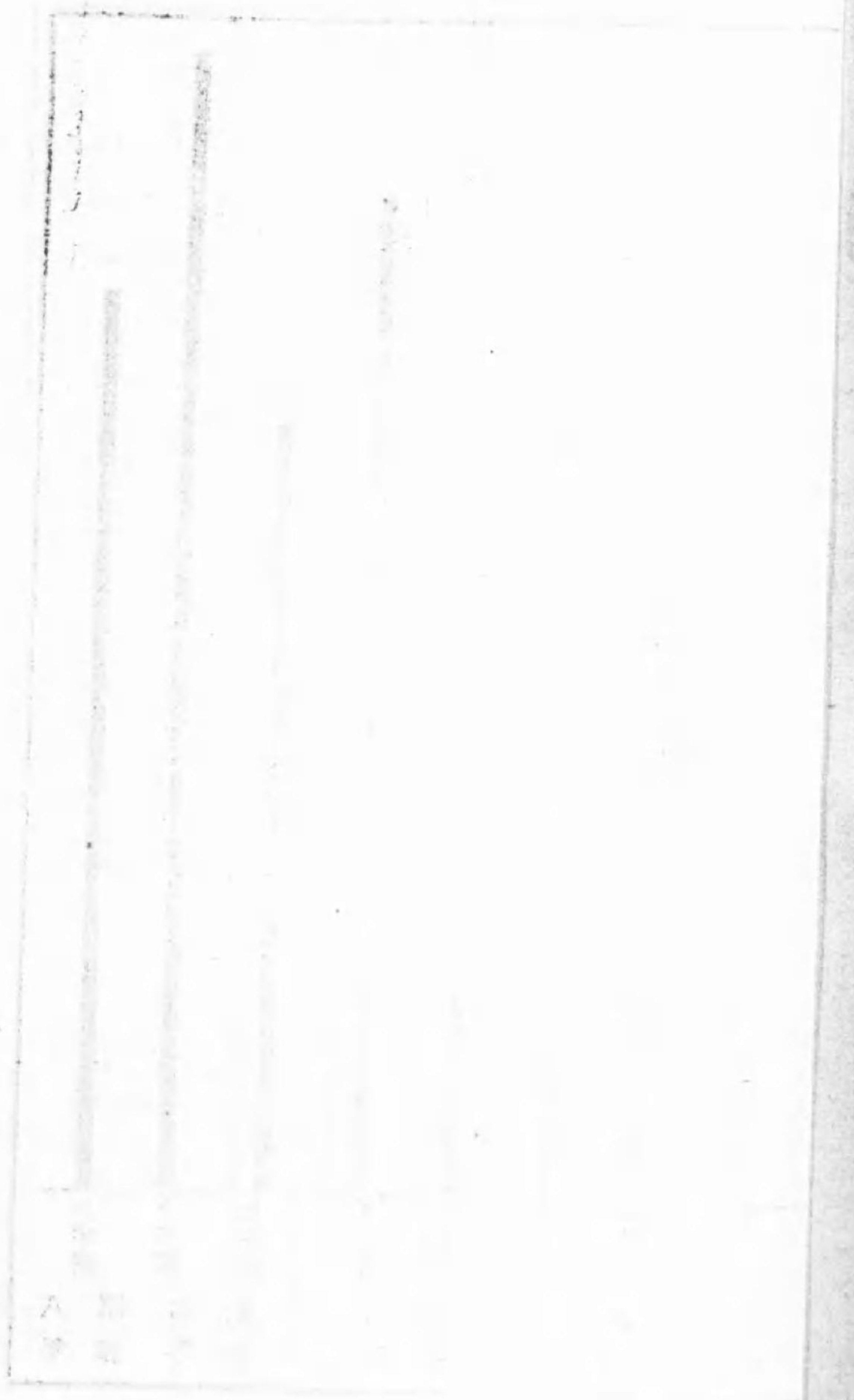
一次電壓
二次電壓
及

一〇、〇〇〇「キロワット」
六六、〇〇〇「ヴォルト」
六六、〇〇〇「ヴォルト」
三三、〇〇〇「ヴォルト」
二二、〇〇〇「ヴォルト」

ピーエス二零番相當撚銅線
五〇「サイクル」

	種 類	屋外用水冷式	
	周波數	五〇「サイクル」	
受 電 設 備	避 雷 裝 置	六六、〇〇〇「ヴォルト」油入遮斷器	二組
	受電用配電盤		一組
送 電 設 備		三三、〇〇〇「ヴォルト」油入遮斷器	二面
		二二、〇〇〇「ヴォルト」同 上	三組
	避 雷 裝 置		四組
	送 電 用 配 電 盤		五組
			六面
			一式

遮斷器操作用蓄電池並充電裝置



文化の華放送事業概況

日本放送協會東北支部は昭和三年六月九日創立總會を開いて成立し役員選舉の結果左記の通り當選し主務省の認可を得て就任した

役員	氏名	同	同	同
理事長	佐久間 俊一	同	小林 富吉	
常務理事	佐藤 吾一	同	金田 一國士	
理事	伊澤 平左衛門	同	三浦 權四郎	
同	福島 禎藏	監事	一 力次郎	
		總務部長	鈴木 源二	

昭和二年八月十六日仙臺市青葉莊の地をトシ演奏所地鎮祭を行ひ直ちに建築に着手、同十二月廿八日竣工した、又同年十月十三日仙臺市原町天置前に放送所を設置する事に決定し直ちに工を起し同三年四月二十八日施設完了した、放送所施設完了後試験放送を行ひ同年六月七日電力一〇キロ、坪、放送所敷地四、〇〇〇坪あり、演奏所は鐵筋コンクリート平家建にして、事務室は木造二階建とし工藤延治郎氏の請負にかゝり放送所は全部鐵筋コンクリート平家建にして、仁田藏寅氏が請負

つた、放送機は英國ウエスタン式でアンテナの高さ二百尺である。

放送開始當時の加入者は僅かに二、六六七口を關東支部より引繼受けたものなりしが、爾來各種の宣傳勸誘方法を講じ之れが普及に努力せる結果、年々増加の趨勢を辿り、其の三週年に於て二萬五千を獲得し昭和八年六月の五週年に於ては五萬に到達するに至つた、其の事業概況を列擧すれば左の如くである。

昭和七年度末事業概況

一、會員數	七〇七名	
一、出資口數	七四六口	
内譯		
宮城縣下	三五八名	三七四口
福島縣下	一二五名	一二八口
岩手縣下	一二八名	一四六口
山形縣下	九五名	九七口
青森縣下	一名	一口
一、職員數	百十四名	内(仙臺九五名) (秋田十九名)
放送部	十二名	

技術部 三八名
 總務部 六四名
 加入の部

七年度に於ける加入申込は非常時局の影響を受け六年度に倍加して二萬三千九十九口の許可を見た
 が一面五千九百二十七口の廢止があつたので差引一萬四千三百九十二口の純増加となり年度末に於
 ける聽取者現在四萬八千十の加入を算するに至つた、之れを縣別にすれば。

宮城縣	一九、五二二
福島縣	八、一七五
岩手縣	三、八三五
山形縣	五、一二七
秋田縣	八、四六九
青森縣	二、八八二
計	四八、〇一〇

となり参考として各放送局所在地聽取者密度一覽表を左に添付す
 各放送局所在地聽取者密度一覽表 (昭和八年三月三十一日現在)

順位 放送局 世帯數 聽取者數 百世帯當加入者數

一	東京	一、〇四四、八〇二	四〇四、六五〇	三八、七
二	仙臺	三五、八二八	一一、二八八	三四、三
三	大阪	五四一、〇三三	一七二、二〇〇	三一、八
四	秋田	九、二九〇	二、七四四	二九、五
五	京都	二〇二、八一四	五九、七一六	二九、四
六	名古屋	一九〇、三七九	五四、四二八	二八、六
七	静岡	二六、三三三	七、三二八	二七、九
八	岡山	三一、〇二一	八、二六三	二六、六
九	廣島	五八、九五二	一一、九一二	二一、九
〇	札幌	三二、七五二	七、一〇二	二一、八
一	福岡	四三、四九六	九、二〇四	二一、二
二	長野	一四、八四九	二、九九七	二〇、三
三	小倉	一八、五七五	三、五七九	一九、三
四	熊本	三二、三八三	六、一二六	一九、〇
五	松江	九、六八二	一、七六四	一八、二
六	函館	三八、二九一	六、七九一	一七、七
七	新潟	二四、八一七	四、三八三	一七、七

一八	金澤	三三、八一〇	五、八六〇	一七、三
一九	高知	二二、五一六	二、八四八	二二、六
(一) 七年度中の加入申込は二萬五百八十一口で其取扱所別は				
一、	窓口受付	一、三一一		
二、	郵便局取次	四、〇〇一		
三、	地方囑委託取次	二、一〇八		
四、	ラヂオ商取次	四、三二五		
五、	電氣業者取次	四、七八〇		
六、	其他取次	四、〇五六		
計		二〇、五八一		
(二) 電氣業者取次内譯は左の如くである				
	北海道電燈秋田事務所	一、二〇六		
	福島電燈	九三〇		
	増田水電	四四六		
	宮城縣電氣局	六九三		
	會津電力	三一六		
	山形電氣	二七二		

盛岡電燈	一三三三		
其他計	四、七八〇		
と云ふ状態で最高の取次者は何と云つても電氣業者が首位である。			
(三) 七年度許可廢止狀況			
七年度中の許可、廢止を月別に見るに、許可の方の最高は四月の二、六八四口、最低は十一月の一、二四二口だが花季に増加し冬季に減するものが常態らしい、廢止の多い月は八月の五八二口、二月の三八〇口で之れも亦季節に支配さるゝ模様である。			
資産負債勘定表 (單位圓)			
資 産 の 部		負 債 の 部	
土 地	五一、〇八三	出 資 金	一四九、二〇〇
建 物	一六〇、四五五	保證預金	六五〇
工 作 物	四九、一〇四	假 受 金	六九一
機械器具	一三五、八六九	本部勘定	二六五、一四一
銀行預金	四〇六		
振替貯金	一一、九六一		
現 金	七七		
保證預ケ金	四六三		

前渡金	五二五
有價證券	三〇〇
非常連絡裝置 費未清算金	一、六三九
本年度缺損金	二、七九七
計	四一五、六八二

四一五、六八二

宮城電気鐵道株式會社

我が宮城縣が全國的誇り得る隨一のものは松島の景勝である。
 此景勝の地を縦貫して交通機關の使命を果してゐるのは宮城電鐵である。
 省線仙臺驛に續く北口を基點とし、商港鹽釜を経て風光明媚の松島海岸を縫ひ、千鳥飛び交ふ海岸に沖の白帆や煙る松、磯打つ波に旅情を慰め、農村漁村の數々を経て、商港として漁港として牡鹿半島の要都をなす石巻市に至る一大軌條が宮城電鐵の經營に係るものである。
 今同社の資産状態、經營振りを等々擧ぐれば左の如くである。(單位千圓)

記

財産目録 (昭和八年三月現在)

拂込濟資本金	五〇〇、一〇〇
仙臺石巻間建設費	六、七九四、九九九
鹽釜臨港支線建設費	九一三
未拂建設費	二、三二〇
自動車興業費	三、九四五

自動車業収入	營業分當額	雜業收入	運輸雜收	貨車收入	客車收入	收入狀況	合現預未	有假貯所	松島遊園興業費
							計金金金	入證金券金	地品物土
									費

三、四九、四九一	三、八、三八二	六、四、六二八	三、二、四七五	三、三、七八五	三、五、六四一	六、三、五五五	一、四、五	七、九二〇、三八七	二〇四、一二四	二〇、四二六	三、九〇八	五、五三三	一、九九二	二、三五、九八五	一、八四四
----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-------	-----------	---------	--------	-------	-------	-------	----------	-------

松島遊園收入

合計

一、四〇七
二、三九、二三七

即ち同社半期の營業收益總額は二十三萬九千圓で一ヶ年四十七萬八千圓と云ふ巨額の收入を擧げてゐる、夫れに同社年來の懸案たりし電力料並に借入金利子等は本春以來山本社長並に重役諸氏の熱心なる運動功を奏して何れも引下げとなり、双方通じて年額四萬圓に近き經費の節減を見る事となり今期より既に若干の餘裕を示すに至つた事は同社の爲め喜ぶべきである、而して現重役の顔觸れは左の如くである。

取締役社長	伊澤平左衛門次
同	大宮司雅之輔
同	松浦善熙
同	遊佐壽助
同	中村梅三
同	監査役
同	高城

松島電車株式會社

松島電車株式會社は、大正十一年三月の創立になり、資本金十萬圓全額拂込済である、天下の名勝松島の景勝紹介を唯一の目的とするもので、營業路線は省線松島驛より松島海岸に至る二杆一の區間である、創立當初は地方財界も今日ほどに疲弊せず且競争相手もなかつたので、至極順調に経過したが、地方經濟の困憊が深刻になるにつれて、沿線居住者の利用が低下する旁ら、宮城電鐵の松島延長、自動車の出現等により、非常な苦境に立つに至つた、元來同社線は純粹の遊覽施設の性質を帯び、沿線に恵ぐまれてゐないので、一般的不景氣による觀光者の減退、競争相手の出現は、直接營業上の脅威となり、死命を扼されることになつたのである、斯くて同社初まつて以來の苦難時代を迎へ、營業廢止さへ眞面目に論議されるに至つたが、單に經營不振の一事を以て地方的に意義ある交通機關を廢絶せしむることは、地方問題として考へなければならぬと云ふ營業繼續論も出で、相當長い間幾多の論戰を續けた末遂に營業繼續論が大勢を決し、廢止の危機を免れることになつたのである、然し單に營業繼續を決定したのみでは従來の苦患を一掃する事は出来ないので、内外共に更生一新の實をあげるため、重役一統悲壯な決意を堅めて路線改良、車輛改造を圖り以て面目を一新して、背水の陣を敷いた乾坤一擲の此の大壯舉が果たして更生の實をあげ得る素材となり得るや否やは尙ほしばらく靜觀の必要あり

るが、重役一統の心事が茲まで結束し協同するに至れば、必らずや慶福すべき業績を招來し得るものと確信される。孰れにしても松島電車はなくしてならぬ存在である、宮城縣下に於て最古の歴史ある電車事業と云ふばかりでなく、縣下の誇りとする松島紹介の功績者であり、將來其の使命は一層重大となるのである、斯かる大局的見地に基づいて、更生の意を決したことは、全重役の社會的良心を表徴する有力な證左で、滿腔の敬意を拂ふものである。

- | | | | | |
|-------|---|---|---|---|
| 取締役社長 | 藏 | 元 | 雄 | 吾 |
| 專務取締役 | 松 | 田 | 雄 | 一 |
| 支配人 | 佐 | 々 | 木 | 駿 |
| | | | | 角 |

秋保電氣軌道株式會社

秋保電氣軌道株式會社は資本金八十萬圓にて仙臺市長町から秋保温泉間を營業區間としてゐる、同社は秋保石材軌道と云つたのを電化して現稱となつたもので創立當時の主要營業目的は石材の運搬及之れが販賣にあつたが電化後乗客輸送に主力を注いで今日に至つたものである、當社は沿線に地方産業多く此の點非常に恵まれてゐる、即ち輸送貨物の大部分が石材にある如く石材は沿線産業界の首位を占め次いで農業産物の輸送が多い、雜貨輸送はまだ沿線に大きな人口密集地がなく聊か寂寥の感を與へ未だ片荷運轉の域は脱しないが漸年沿線開發が行はれてゐるから相當發展すべきは言を俟たない、乗客輸送の方は貨物輸送以上條件よく前途頗る好望視されてゐる、即ち秋保温泉の發展である、秋保温泉は縣下有數の温泉である上交通機關の關係上秋保電軌と運命を共にする位置にある處から、よく秋保電軌と手を握つて乗客誘致の方策を講じ、常に努力してゐるので年々浴客を増加し此れが全部秋保電軌を利用すると云ふことになつてゐる、又沿線は農村經濟の回復と相俟つて漸次活況を呈し來たり一陽來福の秋が來たと云ふことが出来る。

專務取締役 小林軍太郎

繁榮華やかなる電機界

東京電氣株式會社

資本金 三千九百五十萬圓
 社長 山口喜三郎
 本社 神奈川縣川崎市堀川通七十二番地
 工場 川崎工場

東京府下大井町關ヶ原一、三〇三番地 大井工場
 大阪市西淀川區大仁東二ノ六 大阪工場
 福岡縣小倉市板櫃町一、四〇四番地 小倉工場
 大連市秋月町二〇 大連工場

販賣部出張所

主要製品並販賣品目
 マツダ電球、
 積算電力計、
 八拾四種

小	奉	哈	大	上	臺	京	福	金	札	仙	名	大	東
倉	天	爾	連	海	北	城	岡	澤	幌	臺	古	阪	京
	賓										屋		
出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
張	張	張	張	張	張	張	張	張	張	張	張	張	張
所	所	所	所	所	所	所	所	所	所	所	所	所	所

電	配	配	屋	屋	屋	ラ	家	醫
流	線	線	外	内	外	ヂ	庭	療
制	器	器	照	照	照	オ	用	用
限	具	具	明	明	明	用	電	機
器	具	具	器	器	器	機	氣	械
	具	具	具	具	具	械	器	類
	具	具	具	具	具	具	具	
二	十	十	六	十	十	十	十	十
種	種	種	種	種	種	種	種	種

研究所製品

水銀ランプ、光電管、マグネシヤ耐火管並に坩堝、タングステンアークランプ、標準カドミウム電池透明熔融水晶管、眞珠色熔融石英管ブラウン管、ネオンランプ檢電器カラスクリーン、ネオン放電管熱電對、テレンックス硝子製絶緣體、其他

沿革

マツダ電球の製造元たる東京電氣株式會社が電球製造業者として呱呱の聲を揚げたのは、電燈球の發明せられて後僅か十年の明治二十三年四月である。當時の經營組織は合資會社にして白熱舎と

稱し電球だけの製造目的で創立されたのであつた。次いで明治二十九年二月株式組織に變更して社名を東京白熱電燈株式會社と改め、同三十一年十月芝區三田四國町二番地に本社を移轉し同三十二年一月現稱東京電氣株式會社と改稱して營業の目的を電球製作の外一般電氣機械器具の製造販賣並に工事請負に擴張し、大正二年七月本社及工場を川崎に移轉して現在に至つたものである。其間研究に製造に幾多の難關に遭遇しながらも克苦精勵遂に今日川崎に於て四万坪の工場を擁し大井、大阪、小倉、大連等に分工場を設くる等本邦隨一の偉容を誇るに至つたのである。一方科學的研究及科學的經營は自動製作機械の活用に因る大量生産施設の完成と相俟つて、世界屈指の電球製造大會社となり、また常に凡ゆる方法を以て照明知識の普及を計り吾が國照明界の發達は一向同社の教導によるものと云ふことが出来る。衛生保健に、産業能率増進に多大の貢獻を爲せる事實は今更述べたるまでもなく廣く一般に知られてゐる。

東京電氣仙臺出張所

世界的大電氣メーカーたる東京電氣の營業前線に神經系統の末端の如く鋭敏に火花を散らして活躍するのは、營業組織上尖銳部隊として重きをなす全國十四の出張所であるが、其の數多き出張所中取り分け優秀なる業績を保持してゐるものの一に仙臺出張所を特筆しなければならぬ。營業擔任區域は東北諸縣であるが東北電氣界に於ける實勢力は牢固拔くべからざるものがあり斷然業界第一人者の貫録を示してゐる。取扱品は斯界最高品を以て自他共に許すマツダランプを初め積算電力計

照明器具、醫療機械等にして需要力の薄弱な東北地方にあつて相當の收穫をあげてゐるのは一に會社本然の信用と出張所當局の努力の賜と云はれる。現所長望月敏男氏は昭和七年六月前所長山崎正一氏の病没後直ちに本社から轉じたもので、少壯氣鋭の典型的紳士である。商才に長け手腕優れ而かも温厚にして抱擁力に富むあたり大人物の風格を示し東京電氣の東北探題としては蓋し最適任である。

株式會社 千代田組仙臺支店

株式會社千代田組仙臺支店は、大正三年に設置され其の營業科目は發電機、變壓器、配電盤、電熱器、電柱、電球、ソケット、電線等の電機器具の外、ベルト、ロープ、鑛油、重油燃焼裝置、人絹バルブ、ゴム製品等である。而してモートル其他電機器具は芝浦製品、ディーゼルは新潟鐵工所、ポンプは荏原製作所、重油は日本石油株式會社、電線は日本電線ベルトは大阪帶革、機械油はバルボリン會社等の代理業で當地支店の營業區域は東北六縣に新潟縣の一部を加へたものである。

得意先は諸官廳電氣事業を主とし、市町村、公共團體、組合等で確定不動の地盤を有してゐる。今假りに仙臺支店の販賣力を示す爲め各種取扱品中比較的需要率の少いディーゼルに就いて一例を擧ぐれば藤島町組合電氣の五百馬力、氣仙水力の五百馬力を初め、佐沼外二ヶ村水利組合の三百馬力

登米町外一ヶ村の三百馬力等は何れも宮城縣廳の手を経て當支店から納品したものである
 以上の如く扱品が一流會社の製品であり且つ得意先が各官廳、自治團體、電力會社等で販路開拓
 の當初こそ極めて苦心を要したことは想像されるが、現在では既に他の侵犯を許さぬ確定的地盤を
 得て堂々たる營業方針の下に業界稀有の好績をあげてゐる。
 支店長市川保氏は大正十四年着任以來當時數多き強豪を向ふに廻はして銳意販路の開拓に努め今
 日の業礎をつくつた人で現在の大口得意は殆んど氏の手腕によつて建設されたものである。
 氏は稍寡黙謹嚴、柔和な性格の紳士で洗練された社交振りは水際立つて感じよく、謙讓に過ぐる
 の風はあるが落着いた物靜さは凡百の及ばざるところである。

株式會社 守谷商會

守谷商會は明治三十四年九月の創立に係り元東京市京橋區三十間堀一丁目であつたが業務の進展
 につれて數次の移轉を重ね更に營業所の狹隘を感じるに至つたので昭和四月三月現在の吳服橋に事
 務所を新築し今日の隆盛を見るに至つたものである。

營業所所在地

東京市日本橋區吳服橋二ノ三
 株式會社 守谷商會

- 大阪市西區立賣堀北通六丁目 守谷商會 大 阪 支 店
- 名古屋市西區御幸本町迪六丁目 守谷商會 名 古 屋 支 店
- 小倉市室町一二八 守谷商會 九 州 支 店
- 金澤市上堤町一五 守谷商會 北 陸 出 張 所
- 仙臺市多門通り 守谷商會 仙 臺 出 張 所
- 京城府古市町四三 守谷商會 京 城 出 張 所
- 札幌市南一條西十三丁目 守谷商會 北 海 道 出 張 所
- 臺北市本町一丁目 守谷商會 臺 灣 支 店

高崎市新濱町一ノ四七
 守谷商會 高雄出張所
 スラバヤ市
 日本商品陳列館内
 守谷商會 爪哇出張所

即ち本支店を通じて營業所は十一ヶ所である、

主要取扱商品の中川崎車輛株式會社製では機關車、客車、貨車、鋼管等を主なるものとして扱ひ日本エタニットパイプ株式會社製品では本邦隨一の稱あるエタニットパイプ——之れは鐵管や其他のパイプの缺點を補ひ特徴を取入れたもので、最近非常な勢ひで進出して來たものである。

一、上水道管 一、下水管

一、瓦斯管 一、電纜管

一、灌溉導水管 一、各種工業用管

等其用途は多種多様であつて特徴を擧ぐれば

一、耐久力が無限である事

アスベスト纖維とセメントを原料とする本パイプは大氣中は勿論、地中、水中に於ても酸化、蝕する事なく耐久力は無限である。

一、内面が平滑で不滲透性である鐵管は時の経過に従つて内面に狹搾を起し通水能率を減するが、本パイプは内面は硝子の如く平滑で送水量も増大し且つ液體は勿論瓦斯體に對しても絶對不滲透性である

一、其他強度の内壓に耐へる事、弾力性と強靱性とを有する事、電蝕作用絶無である事、熱の不傳導體である事、接合が確實で迅速自由である事、長尺にして輕量である事、價格が低廉である事等の特性は從來の各種パイプを凌駕して著しき利用を見るであらうと斯界から脅威的となつてゐる。

株式會社明電舎製品としては發電機、電動機、變壓器、配電盤、開閉器、其の他一般電機に亘り日本皮革株式會社製品では調帶並に革製品、東京製綱株式會社ではワイヤーロープ、マニラロープ、コットンロープ、日本電熱器製造株式會社製品は電熱器各種、日本空氣機械工業製のニューマチックツールエレクトリックドリル、日本信號株式會社製鐵道信號機一式、東京瓦斯電氣工業株式會社製トカコ電動ホキスト、西島製作所製唧筒一式、NTNボールベアリング製作所製各種ボールベアリング等々以上の外有名なる機械器具類は殆んど扱はぬものはない。

守谷商會仙臺出張所

守谷商會の東北方面の營業所は元福島市にあつたが福島市では中心地點が外づれるきらひがあつ

たので昭和三年秋仙臺市に移轉し同時に當時本社詰であつた現在の主任三浦成介氏が赴任し爾來目醒しき進展を續け今日に至つたが同出張所營業の一端を示せば左の如くである。

營業 狀 態

營業區域は東北六縣で得意先は一般官廳及び市町村、各種組合其他で、取扱科目は本店同様廣汎に亘り機械類ならば殆んど洩らす處がない、仙臺市内電車施設當時、電車三十輛此價格約一十萬圓並びに宮城縣營江尻排水場の揚排水用ポンプ三百五十馬力デーゼル三基、四百馬力電動機三基等は何れも當出張所の納入に係るものでそれによつて見るも同業者中當地出張所の地位と其進出振りを知る事が出來やう。

出張所主任三浦氏は極めて世才に長じた温厚の人で地盤の開拓には縦横の才を振ひ得る手腕家として知られ、最近では日本エタニットパイプ會社製エタニットパイプの宣傳に努力を拂ひつゝある模様であるが、やがて氏の手腕によつて此の劃時代的發明品の凡ゆる特徴は從來の鐵管鉛管其他のパイプ類を一蹴して代るべきに遠からざるの日に實現するであらう。

松 下 電 器 製 作 所

◎年 産 額	七 百 萬 圓
◎營 業 所	八 ヶ 所
◎工 場	十 四 工 場
◎配 給 所	四 ヶ 所
◎製 品 種 類	三 百 餘 種
◎從 業 員	二 千 有 餘 名

其實勢力を算へ來れば電器製作界に於ける東洋の覇權を握るものと稱するも敢て過言ではあるまい。

松下製作所を説くには先づ所主松下幸之助氏の所信から述ぶる必要がある、即ち氏が業務に就いての精神、松下の信条とする處は

綱 領

營利と社會正義の調和に念慮し、國家産業の發達を計り、社會生活の改善と向上を期す。

向上發展は各員の和親協力を得るにあらざれば難し、各員は自我を捨て互讓の精神を以て一致協

信 條

トリブルタップ菊型ソケット、ローゼット、シーリングブロック、テーブルタップ、三燈用差込プラグ、丸型タンブラースキツチ、マートツコンセント押込タンブラースキツチ同プレート、Bコンバウンド製品、二燈用差込プラグ、三燈用差込プラグ、二燈用クラスター、三燈用クラスター廻轉プラグ三段點滅器、ト型クラスター、握スキツチ、シリス差込プラグ、新案點滅器等C其他、陶器差込プラグ、陶器レセプテークル、引戸用ベル、卓上ベル

一、ナショナル乾電池

A、ランプ用乾電池、小型、中型、大型、A型、一號、二號、三號
B、通信用、平角二號、三號、四號、特三號、丸型一號、三號、正角二號、五號
C、燈火用、大丸、中丸、小丸、大角、小角、ペンライトユニット一號、二號、ナショナルキヤンドル（電池蠟燭）ラチオ用、B一號、B二號C二號C三號

一、電 熱 器

A、ナショナルアイロン三ポイント、四ボンド、五ボンド、六ボンド、七ボンド、十五ボンド、自動アイロン四ボンド
Bコンロ、黒珪瑯引（スキツチ付及スキツチナシ）五〇〇ワット、七〇〇ワット、ニツケル鍍金（同上）五〇〇ワット七〇〇ワット
C、ストーブ大型五〇〇ワット、小型二四〇ワット
D、コタツ、丸型六〇ワット、角型六〇ワット

一、ナショナル受信機、三球式清聴用、三球容量、再生式、四球音量調節付、五球遠距離用、ミゼット三球式、その他各種部分品

以上の如く全く當所は廣汎なる電機ラヂオ器の製作販賣業として乗出し、しかも品質優良廉價なる主因はすべてが完備せる工場に於て大量製産を行ふ事にある。

特に最近發賣せる、ナショナル受信器はAK發表の昭和六年度懸賞家庭用標準型受信機の一等に當選せる程の優秀品であるがその構造及特徴としては使用球及回路はUX二二七再生檢波UX二二六低周波一段増幅KX一一二の整流で、再生は電磁再生を用ひ、波長は二五〇米——五五〇米までは略一様な再生度を保つ特殊なるホピンよりなるコイルを使用し、受信操作が頗る容易且つ安定なる點に於てAK技術部より賞讃された品である。

また電流部及配線はABCエリミネーター金屬板を挿出して、或るケースの外部には導線を挾持するやうに、金屬板に切溝を設けた特別な端子を突出せしめ、その他ソケット、低周波トランスおよびコンデンサー、コイルに至るまで總ての導線接續部には前記特殊の端子を装着してあるから配線並に工作極めて簡易であつて完全に接續し得る特徴がある。

更に受信機能部の總ては鐵板を以つて覆ひ使用中塵埃の侵入を、また球の取かへその他の場合に於ても受信機の蓋を開いても機能部に手を觸るゝ事を防ぎ、もつて受信機の故障を極度に減少せしめるやうな構造になつて居る事は實に曾てなき發明であると稱せられてゐる、従て本品の賣行きは日尙ほ淺きに拘らず飛ぶが如く其眞價は充分推測することが出来る、而して最近は又海外に向つて

英字カタログを分布し、更に英字商報を發行せんとする計畫あるやに聞くが、國際的活躍こそ見ものである。

會ては輸入品たりし電機器具類が松下の手によつて改良を加へられ海外へ逆輸出を試みらるゝと云ふ事は實に業界の痛快事であり國家的に意義深きこと、云はなければならぬ、森仙臺出張所長は昭和七年四月出張所開設と同時に若き活動盛りの連中を引つれて着任したものであるが、氏は嘗つて本社在勤中から東北開拓の衝に當つて居たゞけに東北の事情に明るく赴任早々から素晴らしい成績を挙げ餘りの俊敏さに本社幹部も舌を巻いてゐるほどである。

小松原電氣商會

英才俊敏、仙臺業界切つての手腕家である。元若生電機に於て童子良陸氏等と才腕を揮つたが若生没落後直ちに獨立開業し、今日まで獨立獨行遂に事業大成の域に達したのである、照明器具、ラヂオ、電氣機械器具、工用諸材料等の販賣をなし營業の主眼を電氣工事に置いてゐる、縣電市電大學、師團等の信認厚く創立以來幾多の曲折はあつたが大勢的には順調に發展してゐる。

旭電氣株式會社

- 一、會社名 旭電氣株式會社
- 一、資本金 五拾萬圓
- 一、本社 東京市澁谷區代々木山谷町百五十六番地
- 一、大阪出張所 大阪市西區靱南通り二丁目五番地
- 一、仙臺出張所 仙臺市新傳馬町二十五番地
- 一、北海道出張所 札幌市大通り西九ノ一
- 一、工場 東京市澁谷區代々木山谷町一五六
- 一、役員

- 取締役社長 林 文 正 太 郎
- 常務取締役 山 岸 三 郎
- 取締役 武 和 三 郎
- 同 大 葉 久 吉
- 同 谷 口 守 雄
- 同 井 上 彌 周
- 同 小 松 原 六
- 同 山 中 彌 勇
- 同 森 原 嘉 逸
- 同 大 道 良 太

一、本社職員

總務部長

眞鍋榮助

一、出張所職員

大阪出張所長

外社員 十二名

仙臺出張所長

下島源之助

北海道出張所長

高田宗十郎

一、工場職員

技師 成長

鈴木新太郎

一、技工數 男女百五十八名

一、工場坪數 六百九十三坪

一、創立 大正二年八月

一、沿革 大正二年八月創立の旭電球株式會社は當社の前身で當初は「カーボン」

「タンダステン」電球を製作し爾來幾星霜製作上の研究を重ね漸次優良なる製品を産出するに至

つた、大正九年一月現在の旭電氣株式會社を創立して前記會社の資産、營業一切を引継ぎ熟達せる技師技工を採用して工場を擴張すると同時に新式の機械を増設し鋭意改良に努めたる結果特に同社の瓦斯入電球は一般需用家より其品質の優秀なる事を認識せらるゝになつた。

一、製造品目及一ヶ年製造能力並に最大製造能力

製造品目

年産額

最大生産能力

ダンダステン瓦斯入電球

三、七〇〇、〇〇〇個

四、五〇〇、〇〇〇個

カーボン電球

二〇〇、〇〇〇個

三〇〇、〇〇〇個

計

三、九〇〇、〇〇〇個

四、八〇〇、〇〇〇個

一、得意先

同社の大口得意先は東京市電氣局の外横濱、大阪、神戸、京都、金澤、熊本、札幌の各市電、宮城、山口高知の各縣電、第一師團下各部隊

其他諸官衙 東京電燈、京王電氣軌道、鬼怒川水力電氣、東部電力、石川島造船所、大阪電氣軌道、大日本人造肥料、福島電燈、東北電燈、山形電氣、兩羽電氣、青森電燈等の外全國重なる電氣關係筋には殆んど納品入し居る状態で仙臺出張所の如きも開設後日は淺いが主任高田宗十郎氏の活躍振り目醒しきものがあり此處數年ならずして相當の基礎を築き得べきものと見られる。

帝國電氣株式會社

開業 大正十三年六月二十八日

資本金 一百萬圓

内拂込資本金七十萬圓

製造高 年産一千萬個

本社所在地 東京市品川区北品川五三六

社長 鈴木隆晴

営業所 東京市芝區田村町東電ビル四階

支店、出張所在地 仙臺市南町三八

大阪市南區鹽町通二丁目三番地

門司市東本町三丁目

小樽市色内町六十八番地

東京市品川区北品川五三五

工場所在地	東京市品川区北品川五三五	北	海	道	出	張	所
	小樽市色内町六十八番地	九	州	出	張	所	
	門司市東本町三丁目	大	阪	出	張	所	
	大阪市南區鹽町通二丁目三番地	東	北	支	店		
	仙臺市南町三八						

製品種類	同	同	同	同	同	同	同
	五三六	五三六	五三六	五三六	五三六	五三六	五三六
	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七
	工場	工場	工場	工場	工場	工場	工場
	製造	製造	製造	製造	製造	製造	製造

従業員數 八十二名
 事務員 八十二名
 特約店 代理店 二十八ヶ所

國産電球界のピカ一。帝國ランプは今や本邦全土を照らしてゐる。強敵マツダを向ふに廻して思ひ切つた戦法に依つて縦横に馳驅し、少なからず敵勢を惱ましてゐることは周知の事實である。

國産電球の先陣を承つた大同が突如マツダと提携して以來の同社は頓に男振りを上げた、社長鈴木隆晴氏は人も知る電界の名物男だ、令弟孝興君又能く社長の片腕となつて潜勢力侮り難いものがあり同じく常務の加藤利雄氏は文字通り濃厚な紳士の好典型として好評ある人。

マツダに對戦し、血に燃えて亂射亂撃せんとする闘士を巧みになだめ徐ろに策戦計畫を樹てゐるあたりは何と言つても、わが國寶東郷元帥を髣髴たらしむるものがある。さうだ、先陣の功を急ぎ、動もすれば個人的な感情にまで支配されんとする自社の闘士をして先づ「自重」を強へ、而して奇策を授けるあたりの腕の冴えは何と言つても千軍萬馬を往來した古強者である。

斯かる空氣のなかに育つた當社の東北支社は大正十三年本社創立間もなく開設され漸年順調な進展を遂げて東北の業界に相當響いてゐる、西條主任は元本社詰であつたが昭和二年當支部へ轉任せる若き奮闘家で得意先の開拓に寧日なき活動を續けて居る、溫和にして英明なる氏の性格は支店主任としては申分ないとの定評がある。

日本電線株式會社

東京市寺島區向島に廣大なる四千四百坪の地を擁して斯界の強剛を向ふに廻はし一步も譲る事なく輸贏を争ひつゝある日本電線株式會社は、冠絶せる販賣手腕と同社獨歩の優秀なる技術に依り近來愈々聲價を擧げ、全國的にわつて形成した牢固抜くべからざる地歩は到底同社の追隨を許さぬ堂々調歩して迫らざる陣營は將に電線界の一大壯觀である、同社は明治四十年二月小森電線製造所を買収して創立せるものにして創立の翌々年即ち明治四十二年新工場を建設して生産増加を計り、更に大正十三年鐵骨塗料工場を建設して實質的に面目を改め續て第二編組工場第三編組工場及びゴム工場の建設をなし、大正十五年ケーブル製造工場其他の大増設工場を完成し其の生産能率の上に一大變革をもたらしたが、時代の要求は峻々として停止する處なく茲に於て同社は斷然一大飛躍の前提として川崎市に最も進歩せる紙ケーブル大工場を建設し遂に今日の大を形造つたのである、同社は小森工場時代よりの陸海軍指定を繼承せる一方忽ちにして鐵道遞信の二大需要系統の指定を獲得し名實共に備はる一流電線製造工場の面目を發揮した。小森工場時代より通算すれば三十餘年の歴史を持つ同社は實に電氣界の發達と微妙且つ密接な關係裡に發展し同社の發展經路は將に我國電氣事業發達の尺度を示すものである。

北斗電球株式會社

電球界の寵兒北斗電球は全國的に販賣網を敷き其の鞏固なるは國產業界隨一と云はれる、營業戰線は非常に廣く當社ほど需要先が多く、根深く喰込んでゐるものは少い、西南は九州から北海道に到るまで本邦縦斷的に糸を引いた様に延々盡くる處なき販路は正に業界の驚異である、電球販賣上淺くも廣くと狭くも深くの營業方針其の執れを可とするやに就ては多くの議論の存する處であるが當社は其の執れにもよらずして最も至難とされてゐる廣く深くの獨得の境地に深徹してゐるのであるから同業他社が痛烈なる脅威を感じてゐるのも無理がない。北斗ランプの特徴は品質優秀、價格低廉の二語に盡きる、即ち製品に對して責任感の強い當社は優秀なる技術者に配するに優秀なる材料を以てし、更に近代科學の最高峯とも云ふべき最新生産設備を完備せる上、最も正確度の高い試験設備を以て全生産品に對して嚴密なる検査を加へることに依て品質優秀のモットーに權威づけ、生産システム、材料購買の合理化、大量生産の三要素によつて廉價供給の根底としてゐる、唯此れだけを以てしても充分他社を壓倒し得る實質を備へてゐるが、尙ほ其の上に良き結實を促がすものに人事關係の強味を存する、即ち社長阿部繁一氏は今日に於てこそ最前線から引退してゐるが業界稀れにみる高潔の人格者で氏の人格は悉く營業方針の上に反映して販賣上よき榮養線となり、販賣當面の中樞西谷芳助氏は斯業界切つての實力者で、而かも熱と努力、豪毅不撓の精神は瘡れて後も

尙ほ止まざるの氣魄を持ち、桑幡常行氏は謙讓行徳の溫和なうちに烈々火の如き眞剣味を藏して居る更に關西の金城湯地を守る松浦清行氏は輕妙洒脫、嫌味なき圓満玲瓏の才幹である、此の人事配列に加ふるに國産電球界に眞價を誇る北斗ランプである、當社の今日あるは決して偶然の所産ではなす。

エビス電球株式會社

東京市澁谷區下澁谷一三六八エビス驛近くに本社工場、東電ビルに營業所を置くエビス電球株式會社は數多き本邦電球界で高級ランプの名聲を博し其の技術の優秀なる點に於ては屈指の誇りを志にしてゐる、工場は本社と同一地内にありタングステン工場は下澁谷一三七五、硝子工場は大森區に設け、製作工程の材料は全部自給自足の方針を樹て數年前既にヒラメント工場を所有してゐたことは全く業界切つての偉觀である。同所製作の電球は現下學界乃至技術者間に決定された最高の諸條件を備へたものと云はれ品質の優秀且つ低廉なことは正に獨歩の異色である、同社の發賣になる親子電球は研究を重ねること多年遂に完全なる光力强弱の使ひわけ自在のもので親子電球の名の下にパテントを取り同社獨特のスペツシャルとして賣出されてゐるが破竹の如き勢の下に電氣界を風靡し今や工場の全能力を傾注して需給の圓滑を期してゐる状態の處關東六府縣下に跨る防空演習以來極力軍部の推稱する處となつて層一層彌が上に注文殺到してゐる、親子電球の特徴は文字通り

電力經濟、料金經濟の兩主要問題を解決せしものにして近代文化生活の根本基調に福音を齎らしたものである。

エビランプは全國的に需要され逐年生産量を増加してゐるが、最近海運界、鐵道方面に非常な進出をなしたことは注目に値する、即ち海運、鐵道共に電球使用條件から云へば最も危険性多く其の破損率も従て多いことは自明の理であるがエビランプが斯うした惡條件下に最優秀の成績をあげてゐることは取りも直さずエビスの眞價が如何に優秀なるかを示して餘りあるものである、經營の陣營は代表取締役純情硬骨の才幹工藤達一氏があり營業全面の闘士としては豪快果斷、熱と力の奮闘兒高橋九郎氏が据はり仙臺出張所主任として全東北を切盛りする長岡三之助氏は温厚明敏の評があり寔に一分の隙なき堂々の配列である。

極東商事株式會社

國産電球界に斷然獨歩の地位を占め悠揚迫らず冲天の意氣を藏してゐるのが極東ランプの極東商事株式會社である、當社は本邦財閥の一片倉系の資本を中心として生れたもので營業基礎の堅實なることは他に比を見ない、販路は全國に亘るは勿論滿鮮臺の主要事業にも喰ひ込み同業他社の追隨を許さぬ特色を備へてゐる。即ち當社の納入先には片倉直系の工場乃至片倉と特別なる關係にある電氣事業が可成りの數に達し絶対に他の襲撃を許さぬ牙城を擁してゐるので、そのみでも優に工場採算を保ち得る實勢下にある、而かも當社製品は質的に最優秀の權威に立ち、販賣價格は大量生

産の爲め最低値まで競争し得るの立場にあるので同業界の脅威として絶えず恐れられてゐる。
東北に於ける地盤は殆んど仙臺遞信局管内主要事業の大部分に亙り納入數量の點、取引會社の數に於て覇權爭奪の騎士として重鎮の貫祿を示してゐる。

専務岩波伯太氏は片倉直系の偉才で頭腦俊敏經營の才に富み技師長崎唯惠氏は單に技術關係に重きをなすばかりでなく經營の樞機に携つて良き女房役をつとめ、外部の戰線に立つ酒井武雄氏は溫良敬虔、而かも販賣手腕も勝れ、人材揃ひの同社は蓋し春秋に富むものと云はなければならぬ。

弘電社仙臺支店

電氣土木工事界に一大飛躍をしてゐる株式會社弘電社仙臺支店主任多田洋吉氏は元北電旭川出張所技師として盡瘁した仙臺商工出身の士だ、本店には元帶廣電燈技師長として又沖電氣札幌支店主任から弘電社支店長として十年間辣腕を振つた武田周吉氏が小屋支配人の安立電氣專務に榮進せるその後釜に抜かれて本店取締役支配人に昇進した。頭腦明敏、性潤達、中々老獪な外交家である。弘電社は資本金壹百萬圓、拂込資本四十萬圓にして第卅二期に於ける今年上半年期の營業狀態に依ると

損益計算	四五七、六一四、二三
當期總益金	四四四、三八四、一七
同總損金	

差引利益金	一三、二三〇、〇六
前期繰越金	一一、九六八、四五
計	二六、一九八、五一

此處分

七〇〇、〇〇	法定準備金
一〇、〇〇〇、〇〇 (年五分)	配當金
一、三〇〇、〇〇	役員賞與金
一四、一九八、五一	後期繰越金

以上の好成績にて前期に比し一千五百圓程繰越金の増加を示してゐる、尙同社は滿洲の開発に依り無線電信工事を請負ひ今春着手し近く竣工の運びに至つたが工費約四十萬圓の豫算であるといふ、滿洲の獨立により會社今後の活躍は蓋し期待すべきものがあらうと。

協立興業社

株式會社協立興業社仙臺出張所は本年七月開設された、主任は片倉景胤氏にして二十二年間鐵道省に俸職し、仙臺鐵道局電力區主任を最後として退職したが多年の盡瘁功勞により従七位勳六等に叙された温厚の士、本柳町六四に事務所を置き、今後電氣並に鐵道方面の土木工事等に活躍するこ

とになつた、本店は東京丸の内有樂町に在り社長は日高電燈並に猿拂電燈兩社長として敏腕を振つてゐる岡崎將次氏である。

東 光 商 會

東光商會は電氣工事専門の大立物で今や全國の電氣事業を對象として隆々たる勢を示してゐる、東北地方には夙に喰込み多くの工事を完成したが、更により一層の飛躍的發展を企圖して仙臺市に東北出張所を設け神尾榮雄氏を其の主任とした、神尾氏は從來久しく株式會社弘電社仙臺出張所長として腕を揮ひ東北電氣界には深き縁故を持つてゐる、弘電社辭任後直ちに東光商會に投じたものであるが東光商會員としての経略はまだ短日月に過ぎずと雖も氏が多年仙臺を中心として植え付けた信用と顔は大いに物を云ひ轉身早々既に大きな仕事を掌中にし大いに同業界を畏怖せしめてゐる、東光商會は若手人材を以て組織され新進智識に溢ふれ活氣横溢と云ふ銳氣潑辣たるものがある、東北に於ける今後の發展は充分期待に價するものがあらう。

童 子 電 氣 商 會

童子良陸氏の經營になる童子電氣商會は仙臺市に於ける新業界の重鎮で中堅勢力の一をなしてゐる、業務關係は非常に廣く仙臺市内に於ける官廳電氣事業等に密接な關係を有し地方電氣事業會社にも根強い地盤を持つてゐる、營業課目は各種電氣機械器具、電氣用工事材料、ラヂオ一般の販賣にして電氣工事には最も優れた手腕を有し屋内外の配線工事では有力筋へ深く喰込んでゐる、資性剛直實力の士で地方電氣業組合、ラヂオ商組合等ではなくてはならぬ人物である。

水 野 電 機 商 會

水野電機商會は好漢水野力四郎氏の經營になり本店及工場は福島縣會津本郷町である、仙臺驛前に廣大なる支店を設け全東北の電氣會社、官廳等を相手に手廣く營業してゐる、會津工場は碍子碍管電氣用陶磁器の専門製作をなし會津碍子のため萬丈の氣を吐いてゐる、會津碍子は其の使用陶土頗る優秀なるに拘はらず大量生産設備完成せる瀬戸方面から近來非常に壓迫されてゐるが、獨り水野工場のみは優秀なる設備と大量生産とによつて真正面から對抗し互角以上の競争を續けてゐる、仙臺支店は自家製碍子の外大阪變壓器、日本電球、富士電機製造等の製品を販賣し一流商店中の鏘々たるものとなつた。

而かも尙ほ氏は絶えず電氣事業會社を訪問し接觸を密にしてゐるので營業は日に日に繁盛を告げてゐる。

資性快活、頗るユーモアたつぷりの愛嬌に富み今では何處の會社へ行つても木戸御免の名物男と

なつてゐる、換言すれば愉快な男である。

神奈川電氣株式會社

神奈川電氣株式會社は三菱電機株式會社、米國ドライパーハリス會社ニタローム線日本總代理店を初め各種有力メーカーと提携し本邦有数の商事會社として重きをなしてゐる、營業課目は電氣機械器具一般、電線電纜、電信器具類電氣計器絶緣材料等電氣用品一般に亘り又電氣工事の設計請負にも手腕を揮つてゐる、販路は殆んど全國に到らざる處なく最近は新興滿洲國に素晴らしい地盤を獲得し地元業者を壓倒してゐる、宮城縣下には既に最も密接な取引關係を有し代理店を設けて活躍してゐるが東北地方には同社販賣線の俊才山田司郎、檜原忠一の兩氏が手腕を揮つてゐる。

福島製作所

福島市會根田字宮内四三株式會社福島製作所(資本金二十萬圓内拂込金六萬圓)の本年上期(五月末締切)業績を見るに(單位圓)

收入

八年上

七年下

營業收入	二三八、〇七三	一九一、四七五
雜業收入	六七六	三三三
計收入	二三八、七五〇	一九一、五〇九
報酬給支	六、八二五	六、五三九
旅費	四、二二五	四、一三五
運費	八、五〇八	七、八九一
通信費	一、一九〇	一、一九九
拂利	二、二三八	二、二六四
支拂子	一五八、九一七	一一八、七六一
材工賃	四一、〇八七	三五、九五二
職工賃	二、二二二	一、五〇二
電氣料	六、六四一	七、〇〇七
燃料及消耗品	一、八一六	一、八六三
工場雜費	三、一二七	二、九二六
其他營業費	一三六、七七一	一九〇、〇四三
計	一、九七八	一、四六五
差引純益		

即ち純益金に於て前期より五百十三圓、前々期より五百九十圓と純益金漸増を示してゐるが右純益金に前期よりの繰越金二百四圓餘を合して利益金を左の如く處分した。

▲一千圓工場移轉に付建物償却金▲二百圓法定積立金▲二百圓退職手當積立金▲後期繰越金七百八十二圓

即ち同期はインフレ景氣と相俟つて軍需品的景氣は關東、關西に俄に活況を齎して諸材料は一齊に昂騰し工料は値上りとなり之が爲め却つて東北地方は益々惠まれぬ立場となつたが、同社は豫ての堅壘を持って専心得意先への奉仕と内部との統制とに努め來つた處幸ひ期央三月頃より聊か好況の影響を受けて業績順調を示し前掲の純益金を計上するに至つたが一面同社は官廳、鐵道方面の地盤開拓に成功し同方面よりの信用を増してゐるがこれにつれ此の機に於て工場の統一を計り合理化作業を爲すべく現第三職場(當市會根田字八反田一、所在敷地約三百五十坪)に事務所及他の職場をも移轉し漸次敷地をも買収する意嚮で移轉費としては七、八千圓を投じて既に四千圓内外で機械を購入した外第三職場には既に一千八百圓内外を投じてゐると云はれる。營業課目は電氣機械器具、メータ、檢定代辨、鐵工、製罐、電氣工事請負等にて専務菊池孝氏は非常な手腕家にして中央業界の猛者を一蹴し獨歩の地位を築上げるに至つた。

宮城縣電氣事業要覽誌 全

昭和八年十月十八日 印刷
昭和八年十月二十五日 刊行

定	金	五	拾	錢	也
價	送	料	金	貳	錢

發行兼編輯人 新妻郁朗

仙臺市原ノ町南目藥師堂西五六

發行所 日本電氣新聞社

電話 三一六九番

東京市芝區濱松町二ノ二九

印刷所 政協社

不許複製





電 電
纜 線

通信用紙絶縁ケーブル
動力用紙絶縁ケーブル
電線電纜接續用品

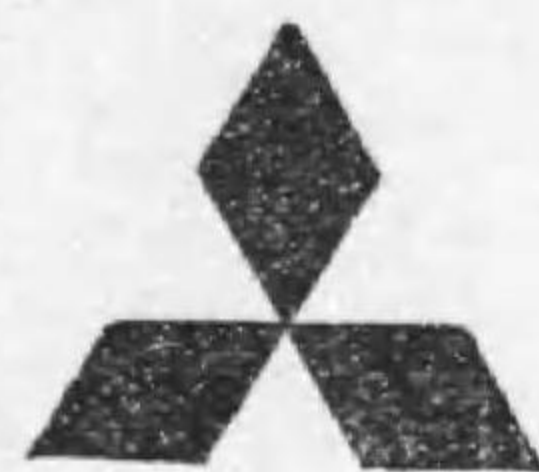
日本電線株式会社

淺草郵便局私書函第十六號

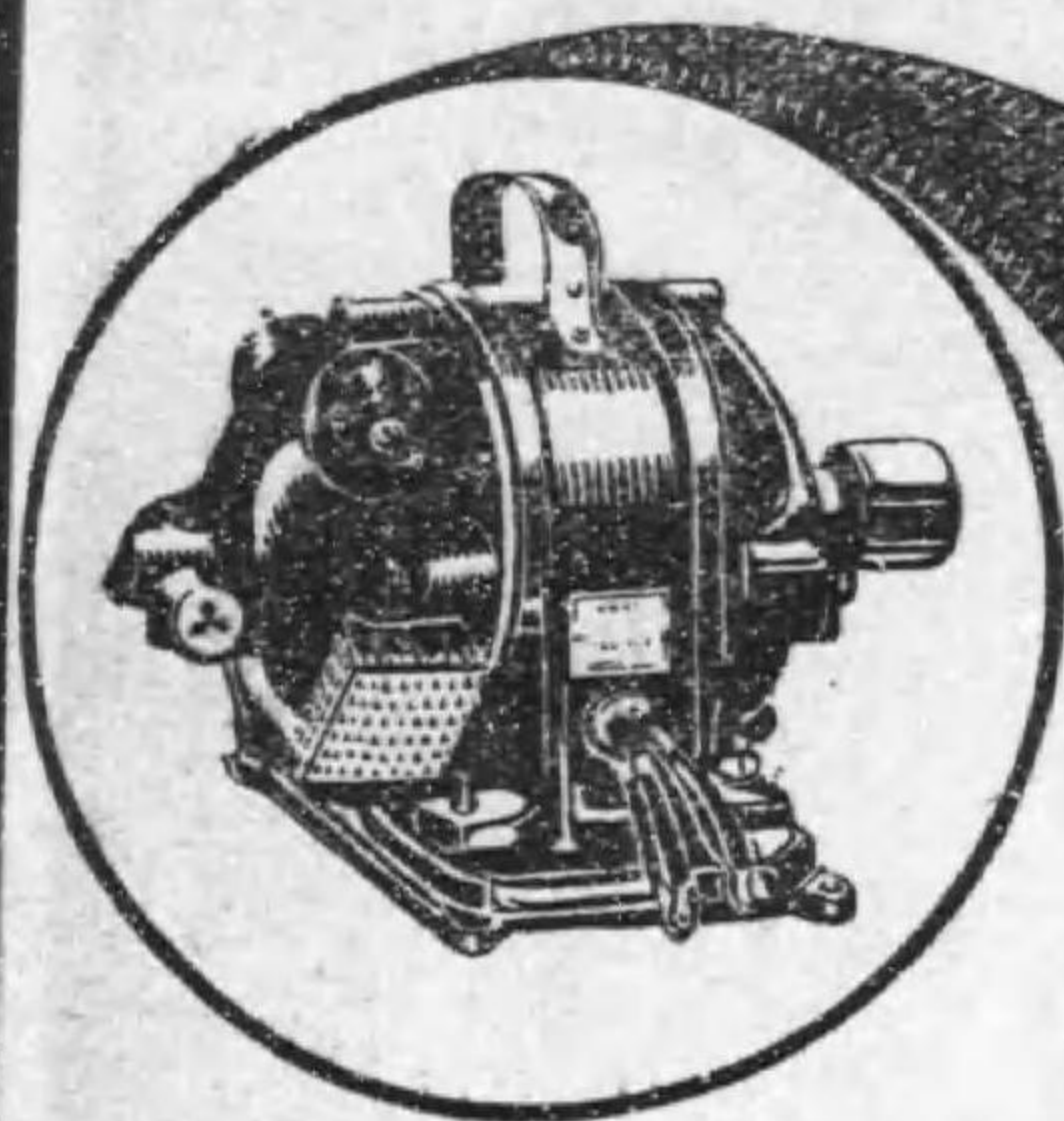
本社及向島工場
川崎紙ケーブル工場
營業所
代理店

東京市向島區寺島町
神奈川県川崎市古川通
東京・大阪
三菱商事株式會社
三倉進和商會
大連商會

農事電化に無くてはならぬモートル。



電燈線から使へる
丈夫な
モートル



三菱農事用モートル

種類
 $\frac{1}{2}$ 馬力・ $\frac{1}{4}$ 馬力

農事用には定評ある
三菱モートルを御使用下さい。
揚水。脱穀。初摺。精米。製粉。製粉
等農業に副業に最も適して居ります。
三菱モートルは親切、丁寧を旨として
作られたもので、構造堅牢故障絶無で
す。

三菱モートルは各府縣農事試験場及各地電力會社より御推賞を蒙つて居ります。(型錄送呈)

一手販賣店

三菱商事株式會社

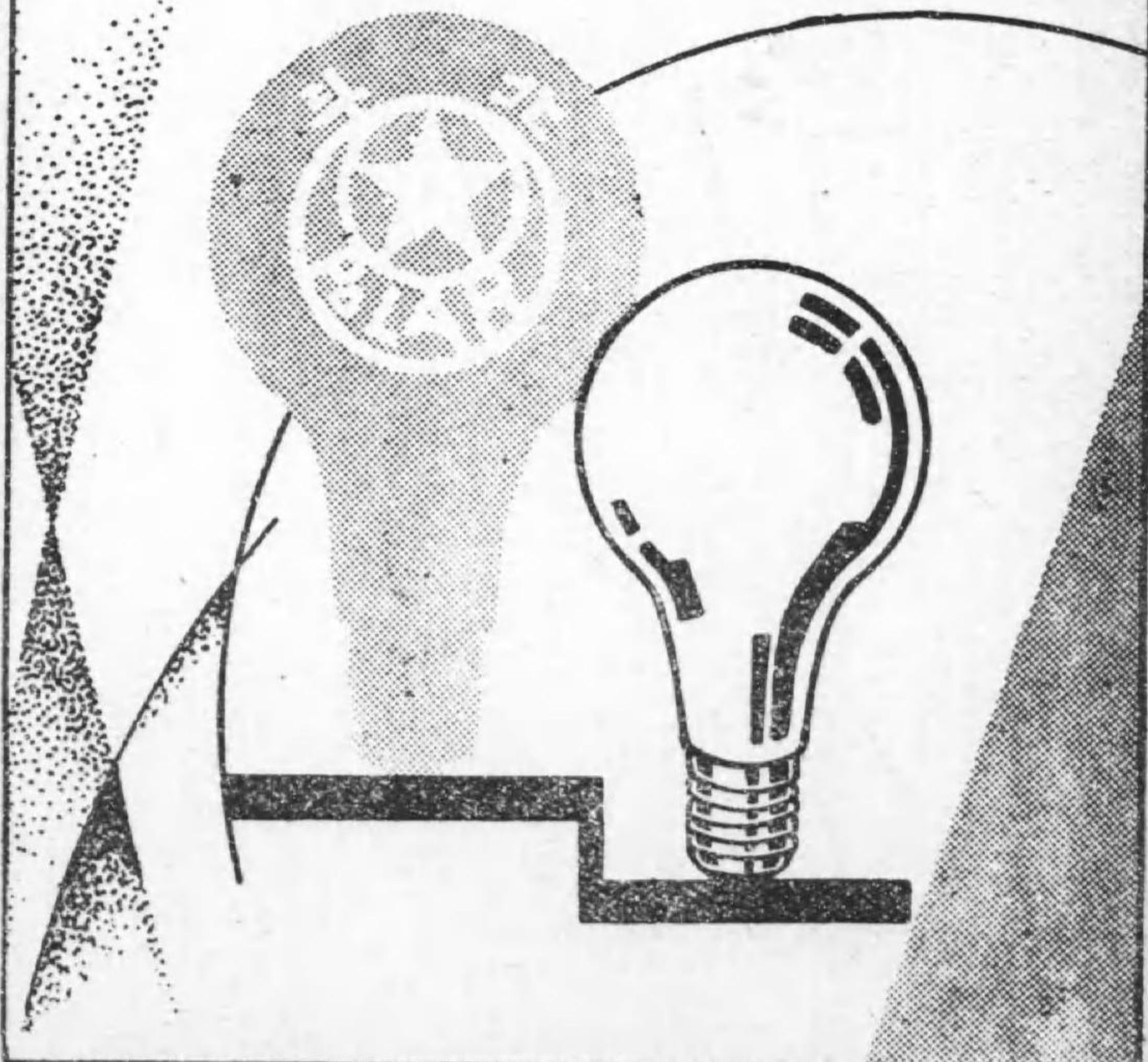
本店・東京丸の内



三菱電機株式會社

製作所 神戸・名古屋・長崎

國産北斗電球



東京中野 斗電球株式會社

防

防空に

オヤコランプ

敵機襲来!

一斉に子ランプ



東京 斗電球株式會社

仙臺支店 仙臺市北四番丁九八 (電話三七九四番)

瓦斯入



旭電氣株式會社

東京市 渋谷區代々木

大阪出張所
大阪市西區靱南通二ノ五

仙臺出張所
仙臺市新傳馬町二五

北海道出張所
札幌市大通西九ノ一

營業目錄

- ▽發電所、變電所
- ▽送電、配電線路
- ▽電氣鐵道設備
- ▽近代的電氣照明設備
- ▽無線電信、ネオンサイン
- ▽煖房、電氣時計
- (其他一般電氣工事設計監督請負)
- ▽電氣用諸材料一式販賣

資本金壹百萬圓

株式會社 弘電社

本社 東京市京橋區木挽町
電話 六九〇・六九二
六九一・三五七七

仙臺出張所

仙臺市北四番丁四四
電話 二一六七番

米國ドライバーハリス會社總代理店
 株式會社橫河電機製作所代理店
 東亞電球株式會社代理店
 株式會社菱美電機商會代理店
 株式會社戶上電機製作所代理店

三菱電機株式會社元扱店
 株式會社日沙商會代理店
 日本マイカ製作所代理店
 日東電氣工業株式會社代理店

仙臺市外記町十二番地十八號 電話仙臺三二二二番



神奈川電氣株式會社

本社 東京市芝區中門前二ノ一
 工場 東京市澁谷區田每町八
 電話芝(43)區自一九〇番至二九五番
 電話澁谷區田每町八
 電話青山(36)六七四六番

支店 大 阪、 門 司
 出張所 名古屋、吳、橫須賀、新舞鶴、佐世保、京城、札幌、熊本、臺北、大連

營業科目

電氣土木一般工事
 設計、請負、監督
 私設電話一般工事
 設計、請負、監督

株式會社 東光商會

仙臺出張所

神 尾 桑 雄
 仙臺市中杉山通九
 電話二三八四

◇電氣瓦斯、土木建築
 ◇工事請負、材料販賣

株式會社


協立興業社

本社 東京市麴町區有樂町一ノ四
 電話銀座自七六五〇至七六五三

仙臺出張所

仙臺市本柳町六四
 電話四一四一

OK ED サンペイ ランプ
 低圧瓦斯
 エコノミーランプ



東京麹町内幸町幸七ビル
 昭和電球株式会社
 東京出張所
 電話 銀座1887

サンペイランプ
 大阪變壓器
 マツダランプ
 電気器具機械
 ラヂオ、雷氣
 工事設計請負

東北發賣元

童子商會

仙臺市國分町
 電話三二七二番

仙臺市東一番丁三十番地

小松原電氣商會

電話二六八四番
 振替口座仙臺七四一八番

營業課目

機械、製罐、電氣計器、土木建築
 積算電力計再檢定代辦
 電氣工事設計請負、監督

株式會社 福島製作所

本社

福島市會根田宮内四三
 電話八八番—二一七番

仙臺出張所

仙臺市東四番丁五
 電話三二七二番

資本金 五百萬圓

宮城電氣鐵道株式會社

仙臺市裏五番丁十九番地

同	同	同	同	取	取	
監	同	同	同	締	締	
查	役	役	役	役	役	
役	役	役	役	役	役	
高	中	遊	松	大	伊	山
城	村	佐	良	宮	澤	本
畀	梅	壽	善	司	平	豐
造	三	助	熙	雅	左	次
				之	衛	
				輔	門	

◇設立 大正二年六月

◇資本金 八拾萬圓

秋保電氣軌道株式會社

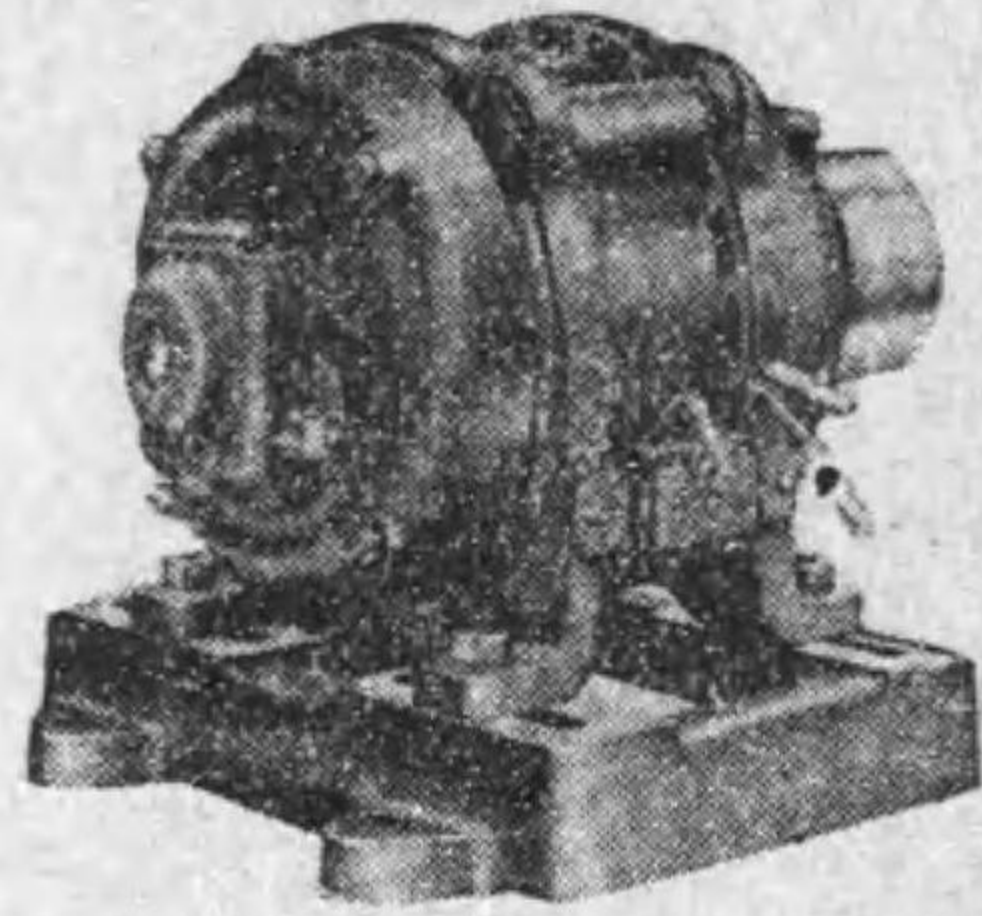
仙臺市長町
電話九〇二

專務取締役 小林軍太郎

松島電車株式會社

設立 大正十三年二月
資本金 拾萬圓

同	同	監	取	專	取	
		查	締	務	締	
		役	役	取	役	
				締		
岩	鶴	大	佐	松	藏	
淵	谷	宮	々	田	元	
利	清	司	木	雄	雄	
右	夫	雅	吉	一	吾	
衛		之	四			
門		輔	郎			



芝浦モートル

營業科目

發電機	配電	盤器
變壓器	電熱	柱球
水計電	鐵電	ソケット
調鑽	線革	ポンプ
	油	製品
		ゴム

株式會社

千代田組

仙台支店

仙臺市南町通五番地

株式會社

七十七銀行

監查役	監查役	監查役	監查役	常任監查役	取締役	取締役	取締役兼支配人	取締役	取締役	取締役	取締役男爵	專務取締役	取締役副頭取	取締役頭取
工藤延治郎	大庭彦六郎	福島藏	八木久兵衛	中山壯輔	横山謹助	佐藤鐵郎	山田萬七	小野惣助	木村清五郎	谷井文藏	佐久間俊一	中村梅三	氏家清吉	伊澤平左衛門

終

